
日本地球化学会ニュース

No.175

2003.12.15

主な記事

●学会記事

- 「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」2004年度受賞候補者推薦の募集
- 2004年度第1回鳥居基金助成の募集
- ゴールドシュミット国際会議（Goldschmidt 2004 Copenhagen）開催のお知らせ
- 日本地球化学会2003年度学会賞・奨励賞受賞者のプロフィール
- 2002年度および2003年度総会報告
- 評議員会，研連，各種委員会議事録

●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ

- 書評

現在，日本地球化学会のホームページを国立情報学研究所ホームページ内の学協会情報発信サービスの中で公開しております。研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらをご覧ください。

URL アドレスは，<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また，独自ドメイン名を取得いたしましたので，こちらも公開中です。

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

日本地球化学会
「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」
2004年度受賞候補者推薦の募集

応募期限 2004年1月31日(土)

日本地球化学会規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記ご参照の上、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

候補者の資格

(柴田賞) 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

(奨励賞) 地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は2004年4月1日において満35才未満である(誕生日が1969年4月2日以降である)ことを要する。

(功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

募集の方法: 本会会員の推薦による。

推薦の方法: 所定用紙に記載した推薦者を2004年1月31日(土)までに学会事務局へ提出する(当日消印有効)。

提出先: 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9

(財)日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦の書式は、会員名簿(2003年度版)のハンドブック部(94ページ)に記載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。なお、書式のわからない場合や、この件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(下記)までお願いします。

鍵 裕之

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設

Tel: 03-5841-7625 or 4450, Fax: 03-5841-4119

E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

2004年度第1回鳥居基金助成の募集について

2004年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは2004年1月末日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。

なお今回の助成の対象は、2004年4月から2005年3月までの1年間に実施される海外渡航及び研究集会となりますのでご注意ください。

なお、今回の助成から申請手続きに必要な書類が以下のように一部変更となります。

ご注意の上ご応募下さい。地球化学 Vol. 37特別号に掲載されている申請手続きを以下のように変更して書式を準備して下さい。

申請手続

応募者は、別紙様式の申請書((1)-Aまたは(1)-B)を所定の期日までに日本地球化学会に提出する。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)があれば添付すること。

提出先: 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9

(財)日本学会事務センター内

日本地球化学会鳥居基金委員会

なお本件に関する問い合わせは庶務幹事(下記)まで。

鍵 裕之

〒113-0033 文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科地殻化学実験施設

Tel: 03-5841-7625, Fax: 03-5841-4119

E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

ゴールドシュミット国際会議
(Goldschmidt 2004 Copenhagen)
開催のお知らせ

会期：2004年 6 月 5 日～11日

要旨メ切り：2004年 1 月26日

※倉敷に引き続き、日本地球化学会も主催団体となります。会員の皆様の積極的な参加をお願いいたします。

The 2004 Goldschmidt Conference will be hosted by the Nordic countries and held in Copenhagen from 5 to 11 June, 2004. The abstract deadline is 26 January 2004 and early registration closes 2 April. Fees have not yet been finalised, but they will be the same as or lower than past Goldschmidt Conferences. We are working hard to make them very low for all students and scientists from less privileged countries.

The web-site, <http://www.goldschmidt2004.dk/>, is now up and further information will be added periodically. There is a poster you can download and print in whatever size you wish, either in colour or black and white. You are welcome to hang them on bulletin boards, attach a copy to email for colleagues and students or print them in newsletters.

The conference will be held in downtown Copenhagen, in university facilities. The program includes parallel and poster sessions to cover the broad spectrum of geochemistry, with a focus on the processes that have formed Earth and the cosmos and that continue to determine the relationships between solid, liquid and gases. There will be a festive Plenary Day · A Celebration of Geochemistry · where well-known experts will give an interesting overview to conference participants, the press and the public, and ending with dinner and the evening in Tivoli. Field trips will be organised before and after the conference in each of the Nordic countries (Norway, Sweden, Finland, Iceland and Denmark) and Greenland. The social program will include trips in the Copenhagen area, Ice-breaker, concerts, museums and the Conference Dinner which will begin with a boat tour of the harbour and continue as a

Nordic 'fest'.

Copenhagen is a beautiful city. In early June, the nights are short and light and when the weather is good, the sky and sea are very blue. Airport and train connections make Copenhagen an easy destination for those coming from Europe and it serves as an attractive vacation start or end for those travelling from further away. Copenhagen airport (CPH) is just 12 minutes by train from downtown and Malmø airport (MMX) in Sweden, served by several economy airlines, is just 50 minutes by bus. North American participants might consider flying to Copenhagen by way of Iceland and those coming from the east, by way of Helsinki.

To be most efficient and to save costs for postage, no paper circulars will be sent. Communication will be by email; abstract submission and registration will be on the internet. To be sure you are on the mailing list for further announcements, please 'log in' on the web-site. It is easy, costs nothing, and insures that you will receive news updates. You are welcome to forward this announcement to colleagues and students.

We are looking forward to seeing you in Copenhagen, next June.

Best wishes,

Susan Stipp and Bjørn Jamtveit
Goldschmidt 2004 Organisers

Susan L. S. Stipp, Assoc. Prof.,
Nano Geo Science
Geological Institute,
University of Copenhagen,
Øster Voldgade 10,
DK-1350 Copenhagen, Denmark.

Bjørn Jamtveit, Co-director,
Physics of Geological Processes,
University of Oslo,
P. O. Box 1047, Blindern,
N-0316 Oslo, Norway.

日本地球化学会2003年度
学会賞・奨励賞受賞者
のプロフィール

学会賞：兼岡一郎会員 (東京大学地震研究所)
受賞題目「希ガスによるマントルの化学的構造に関する研究」



はじめて私が兼岡さんに会ったのは今から25年前のことです。当時私や兼岡さんは東京大学理学部地球物理学教室の地球年代学研究室におりました。それは希ガス地球化学が成熟し地球科学の中の重要な研究分野にまさになろうとして

いる頃です。兼岡さんの地球年代学、同位体地球化学に対する貢献の本質は首尾一貫した研究目的と鋭い洞察力にあります。

兼岡さんは1942年に千葉県で生まれました。学生時代は東京大学理学部に在籍し、小島稔教授のもとで古地磁気学の研究とともに火山岩の K-Ar 年代の測定に関する研究を行われ1970年に理学博士の学位を取得されました。学位を取得された後は、ハイデルベルグにあるマックスプランク核物理研究所に研究員として赴任されました。その後、パリ第6大学のアレグレ教授の研究室に助教授として赴任され Ar-Ar 年代学の研究室を立ち上げられました。

1973年には小島教授の要望に応じて兼岡さんは東京大学に戻られ、大阪大学の高岡教授と希ガス同位体地球化学の共同研究を開始されました。1986年には東京大学地震研究所に助教授として移られて羽生君、熊谷君、山本君をはじめとする多くの優秀な学生とともに希ガス地球化学の研究を行っています。

兼岡さんは常に謙虚な姿勢で地球惑星科学に取り組み、素晴らしい業績をあげられています。He, Ar 同位体比をもとに地球深部の化学構造とその進化に関する斬新なモデルを構築されました。マントル地球化学、地球年代学、南極隕石の熱史そして日本海の起源に関する研究など、出版された論文はおよそ120本にのほります。兼岡さんはまた Chemical Geology のアソシエイトエディターも長年に渡って勤められています。このように素晴らしい業績をあげられた兼岡さんを日本地球化学学会賞受賞者として紹介させて頂くのは、私にとって大変光栄です。

佐野有司 (東京大学海洋研究所)

奨励賞：柴田智郎会員

(北海道立地質研究所環境地質部)

受賞題目「シリケート中の希ガス溶解度の研究」



大気や海洋の起源、火山の発生機構など、さまざまな地球化学分野で、希ガスをトレーサーとする同位体研究は盛んに行われている。この中でも、希ガスの物理化学的性質を知ることは、基礎的かつもっとも重要な仕事である。

特に希ガスのシリケートへの溶解度の決定はこれまでも広く追求されてきたが、シリケート・メルトの化学組成に強く依存し、その詳細な機構は今だに判明していなかった。

柴田君は私の研究室で、学部の卒業研究、修士、博士論文の研究を行った。最初にやった仕事は、オリビンと玄武岩メルト間の希ガスの分配である。それまでの分配データは試料からの脱ガスや大気からの混入成分が多く信頼性のあるデータがなかった。柴田君は、これまでの研究手法とは異なり、実験室内で高压の希ガス雰囲気下でそれぞれの溶解度を求めて、分配定数を求めるという手法を試みた。また、希ガスの溶解度をメルトの表面張力と関係づけて、その大きさを求めることを試みた。メルトの表面張力は、マグマ生成の際にどのようにメルトが集まりマグマが生じていくかということに深く関係している重要なパラメーターであるが、その測定は大変に難しい。その意味で、この研究手法は大変独創的なものであった (In “Noble Gas Geochemistry and Cosmochemistry”, P. 343-345, 1994)。次に、同様の手法を用いて CaO-SiO₂系のメルトについて溶解度を測定した。ここでは、SiO₂の構造との関連を調べ、主に3次元構造と関係していることをつきとめた (Geophys. Res. Lett. 23, 3139-3142, 1996)。また、博士論文では、さらにさまざまな系において希ガスの溶解度がメルトの成分に強く依存し、これまで知られていたメルトの密度やイオン空隙率との相関よりも非架橋酸素/4配位カチオンとの相関がもっとも良いこと、希ガス原子が3次元構造にはいることなどを世界に初めて示した (Geochim. Cosmochim. Acta 62, 1241-1253, 1998)。このように、彼の研究は、希ガス研究と溶媒の構造との関係を定量的に徹底して追求してきた点に特徴があり、GRL や GCA という国際誌に論文が採択されていることからわかるように、国際的に高く評価されている。

また、現在の北海道立地質研究所では、これまでの研究とは異なる水文学的な分野である地下水や温泉の挙動を研究している。泉質および温泉付随ガスの分析から水循環や温泉枯渇問題に取り組んでおり、さらに昨年の有珠山噴火では、地下水観測に基づいた地殻歪の定量的な解析を行い、地下水観測を火山噴火予知につなげる可能性を示した (Geophys. Res. Lett. 28, 1799-1802, 2001; Geophys. Res. Lett. 29, 10.1029/2001 GL 013968, 2002)。噴火の3ヵ月前から水位変化は自己相似 (フラクタル) 的な変化がみられることが分かった。この水位変化から得られるのフラクタル次元は、アコーステックエミッションによる岩石破壊の室内実験で得られるものと同程度で、自己相似的な水位変化は、地殻が破壊される前の岩盤の体積歪変化と考えられるとした (Geophys. Res. Lett. 30, 10.1029/2002 GL 016050, 2003)。

このように、まったく新しい分野に移っても直ちに成果を出せるということからも、柴田君の物理的センスに基づいた研究者としての資質が示される。今回の奨励賞の受賞は、シリケート中の希ガス溶解度の研究」ということで受賞したが、このような新しい分野での研究成果も大いに評価された。

彼の研究者としての特徴は学部、大学院時代を通して、非常にしっかりと物理的教育を受けている点にある。対象となる自然現象や実験事実に対し、自分なりの自然科学に基づいたモデルを構築して、すっきりと説明しようとする研究姿勢を持っており、それができる実力が、彼には充分備わっている。実際、熱力学にも明るく、珪酸塩メルト中への希ガスの溶解度の取り扱いにも、これまでさまざまな熱力学を応用してきた。また、実験装置の立ち上げなど手間のかかる仕事にも労苦をいとわず取り組んでいたし、彼が希ガスの測定に使用した質量分析装置のガスの抽出や精製ラインは、彼自身が周りの機材を工夫して組み上げたものである。彼は、実験屋としての素質と理論屋としても通じる実力が備わった数少ない人材の一人で、将来が期待される人の1人である。

松田准一 (大阪大学大学院理学研究科)

奨励賞：松本 潔会員

(神奈川大学工学部応用化学科)

受賞題目「大気エアロゾルとその気候への影響予測に関する地球化学的研究」



1990年以降、大気化学分野では南極のオゾンホール形成にエアロゾル表面での不均一反応の重要性が見出されました。一方、Charlson らによる海洋生物起源の硫酸塩エアロゾルの放射強制力による気候への影響の仮説が提唱され、ここ数年で機器の進歩と共にエアロゾルの基礎研究の重要性が再認識されはじめました。大気化学分野で初のノーベル賞受賞者である Crutzen は「大気エアロゾルの研究は今後10年にもっとも重点的に取り組むべき課題である」と述べています。

大気エアロゾルは太陽光の散乱や凝結核としての雲の生成、粒子表面での気体の不均一反応などを通して、温室効果気体による温暖化傾向を緩和している可能性が示されています。一方、大気中から洋上へ降下する大気物質は、海洋生物生産活動を抑制したり、栄養源として促進するように影響し、海洋生物起源のエアロゾル前駆体を通して生成するエアロゾル量を左右したりしています。

近年、エアロゾルの気候へ及ぼす影響についての評価は重要視されているにもかかわらず、物理・化学的な複雑な過程を伴うため、その見積りに大きな不確定要素がつきまとっています。

松本さんはエアロゾルの粒径分布などの物理的計測、エアロゾルや降水の多岐にわたる化学分析を行い、これらの問題に気象学的要素を取り入れ、地球化学的なアプローチで挑戦、次々興味深い研究成果を発表されています。

松本さんは、東京農工大で小倉紀雄教授のもとで1992年3月に卒業されました。名古屋大学大学院理学研究科大気水圏科学専攻博士前期課程、同後期課程を田中浩教授のもとで修了され、1998年3月に博士(理学)を取得されました。その後、日本学術振興会特別研究員を経て、1999年1月から東京大学海洋研究所において科学技術振興事業団研究員として戦略基礎研究「海洋大気エアロゾル組成の変動と影響予測」の研究の中心的存在として従事され、現在、神奈川大学工学部応用化学科の助手として勤務されています。

松本さんの業績を年代別にまとめると、卒業研究

として府中市において大気エアロゾルの化学成分の変動と気象要因を解析し、夏期の高濃度であった硝酸塩エアロゾルが硫酸塩エアロゾルなどに比べ、地域的に大きく変動し、風向に依存していることや、降水成分との比較から硫酸イオンが雲内洗浄過程によって除去されていることを明らかにしました。

博士課程前期では、とくに硝酸塩と塩化物のエアロゾル—大気系における相変化を支配する要因を明らかにするため、名古屋市で長期観測を行い、エアロゾル中のこれらの成分が大気中の硝酸ガスや塩化水素との間で動的な平衡を保っていることを見出しました。

博士課程後期からは、小笠原諸島母島での長期連続観測計画の一環としてエアロゾルとその前駆体である硫黄化合物に加えて、有機物エアロゾルの雲粒核形成への寄与が重要であるという指摘、これらのエアロゾルの起源と輸送について生成のメカニズムと季節的変動を明らかにしました。また海洋大気中ではオゾンが日の出時に消滅するなど興味ある知見を得られています。

科学技術振興事業団研究員となられてからは、西部北太平洋域のエアロゾルの時空間分布測定のため、船舶観測をはじめ、利尻島、佐渡島、八丈島、父島からなる大気観測網を確立し、精力的に観測、解析を進めてきました。大気中炭素質エアロゾルの輸送形態のパターン化、地理的特性、そして新しい発生源の可能性を示唆するなど、数々の成果が公表され、またその観測結果はすでに国際共同研究グループでの大気化学輸送モデル研究にも用いられ、多大な貢献をしています。また有機態窒素の物質循環に果たす重要性にも興味を持ち、そのサンプリングや分析にも手がけられました。

最近の松本さんの書かれた論文について、査読者の一人が“*It was not only a real pleasure to review such well written, clear and concise paper but also scientifically exciting.*”というコメントを記されました。いまでもこのような査読者コメントをもらったことのない共著者であった私は喜び半分、うらやましいような複雑な心境でした。論文を書いているときが、野外のサンプリング、分析と同じくらい楽しくてしょうがないという松本さんは、昔から、サンプリングした試料を山積み、分析が終わった時点でのデータをそのままにして、ついつい次の研究に目を向けてしまう体力勝負だけの者にとっては見習うべき存在になるでしょう。

私は松本さんをついついフルネームでみなさんに紹介してしまいます。日本中の街角でよく知られているマツモトキヨシは、科学の世界においてもこれから名実ともにますます有名になっていただきたいと願っております。

植松光夫（東京大学海洋研究所）

奨励賞：渡邊 剛会員（東京大学海洋研究所）
受賞題目「生物源炭酸塩の同位体比および微量元素を用いた高解像度古環境解析に関する研究」



渡邊剛さんは、1994年3月に北海道大学理学部地球惑星物質学科において加藤誠教授のご指導の下で古生代の四射サンゴについて研究を行い、その後同大学大学院地球環境科学研究科において私の下で修士課程では現生シャコ貝骨格の酸素・炭素同位体比、博士課程ではカリブ海の現生サンゴ骨格の酸素・炭素同位体比とMg/Ca比を用いた古環境解析の研究を行いました。学位取得後も、国立科学博物館の研究員として産業技術総合研究所において、川幡穂高博士や鈴木淳博士らと共同で久米島産の化石オオジャコガイの同位体を使った古環境の研究、オーストラリア国立大学において1年半の間、John Chappell 教授や Michael Gagan 博士らと共にインドネシアやニューカレドニアのサンゴ骨格及びシャコガイ骨格を用いた環境解析の研究を進めてきました。このように、彼は「生物源の炭酸塩を用いた高解像度の古環境解析」というテーマで、生物が作り出す炭酸塩に対して地球化学的な手法を駆使し、過去の地球環境を高解像度で復元する試みを続けています。特に、サンゴ礁に生息するサンゴやシャコガイを研究材料として扱っており、近過去の熱帯・亜熱帯の海洋表層環境を高解像度で復元し、将来の地球温暖化の予測をする上でも重要な研究を行っております。

以下に、彼のこれまでの研究内容を紹介致します。現在、全球的な地球温暖化が指摘されておりますが、人類活動が地球環境に与える影響を評価し、将来の温暖化の正確に予測するためには、産業革命以前からの気候システムの推移を復元する必要があります。特に、熱帯・亜熱帯域の海洋表層環境は、近年、エルニーニョ現象に代表されるように、その大気海洋環境が地球全体の気候システムに影響を与えることが指摘されております。しかしながら、熱帯域において過去

に遡れる海洋の人工観測記録はせいぜい50年程度で、将来の地球温暖化に向けた気候変動のモデルを構築するためのデータベースの蓄積が強く望まれております。彼は、最初に石垣島産の成長速度の速いシャコガイ殻を用いて、その酸素・炭素同位体比を用いた高分解能古環境解析のために、冷凍マイクローム法という新たな微小サンプリング方法を開発し、日輪の観測を併用することによって各試料が形成された日付を特定することに成功しました。その結果、シャコガイ殻の酸素同位体比は日単位の水温の変動を記録していることが明らかになりました。その研究成果は、アメリカ地球物理学連合の *Journal of Geophysical Research* (Watanabe and Oba, 1999) に公表され、殻が同位体比平衡下で形成されていることを実証したこと、酸素同位体比と水温の新たな水温換算式を提唱したことにより、国際的に高い評価を得ております。次に、プエルトリコ産のサンゴ骨格を用いて、その酸素・炭素安定同位体比や微量元素 (Mg/Ca 比) を用いて、過去数百年間で最も寒かったといわれている小氷期における環境復元を行いました。彼は、最初に気象データとの対比が可能な1990年代のサンゴ骨格部位の解析を行い、現場海水や気象データなどの比較からこれらの指標の有効性を検討した上で、1700年代に形成された骨格部位を用いて小氷期についての解析を行いました。この研究の最大の特色は、水温の変動のみを記録している微量元素と水温および塩分の変動を記録している酸素同位体比を同じ試料で測定することによって、今まで困難であった水温と塩分の変動を分離して定量的に復元することを可能にしたという点です。その結果、1700年代の小氷期はカリブ海においても、表層水温が現在よりも約2°C低かったこと、復元された表層塩分の季節変化が大きく、雨期・乾期が現在よりも明瞭だったことが明らかになりました。これらの研究成果は、*Marine Geology* (Watanabe *et al.*, 2001), *Coral Reefs* (Watanabe *et al.*, 2002) などの国際誌に掲載されています。特に、*Marine Geology* に掲載された論文は2001年の web site において最多のダウンロードを記録するなど、その研究成果に対する海外からの関心の高さを伺い知ることができます。また彼は、インドネシア及びニューカレドニア産のサンゴ骨格を用いて、その酸素・炭素同位体比や微量元素 (Sr/Ca 比) を使った環境解析の研究も行いました。エルニーニョ現象などに重要な役割を果たしている西太平洋暖水塊の海域に多産し、また続成に強く

化石の保存状態が非常に良いサンゴの *Diploastrea* 属が新しい古環境指標として有用であることを示しました。この *Diploastrea* 属の骨格の酸素同位体比は、エルニーニョ現象がもたらす水温と降水量の変動を正確に記録しており、水温のみを記録している Sr/Ca 比と組み合わせることによって水温と降水量を定量化でき、より明確にエルニーニョ現象に大きな影響を与える西太平洋暖水塊の挙動を把握できることを示しました。その成果は、近く *Geochimica et Cosmochimica Acta* に公表されます。

以上のような研究成果が総合的に判断されて、渡邊剛さんは今年度の地球科学会奨励賞を受賞されました。現在、彼は日本学術振興会の研究員としてフランスの Gifi sur Yvette にある CNRS-CEA 研究所で研鑽を積んでおり、今後の一掃の活躍が期待されます。

大場忠道 (北海道大学大学院地球環境科学研究科)

2003年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告 (TE-34)

氏名 (所属) : 谷本浩志

(国立環境研究所大気圏環境研究領域)

助成 : 海外渡航 (フランス)

課題 : EGS-AGU-EUG 2003 Joint Assembly (欧州地球物理学会米国地球物理連合—欧州地球物理連合2003年合同年会) に参加・発表

提出日 : 2003年8月16日

私は2003年4月6日～11日にかけてフランス・ニースにて開催された EGS-AGU-EUG 2003 Joint Assembly (欧州地球物理学会—米国地球物理連合—欧州地球物理連合2003年合同年会) に参加し、研究発表を行った。本会は、地学・地球物理学・地球化学・地球生物学など地球科学のあらゆる分野から約11,000人の科学者が参加したマンモス学会であった。南欧らしからぬ曇天・雨天に悩まされつつも、プログラムはハードなスケジュールで進行し、全体として非常に盛況であったと言って良いだろう。

私は、大気化学とりわけ対流圏化学を研究分野としているが、大気圏—生物圏における反応性窒素酸化物の相互作用や物質循環・収支について研究を進展させていきたいと考え、特に揮発性有機化合物 (VOCs) と窒素酸化物 (NOx) の結合物質である有機硝酸類に焦点を当てて研究を進めている。本年会では、特別セッションとして設けられた “Atmospheric reactive

nitrogen: Chemistry and interaction with the biosphere”において、近年、我々が大気中における存在を見出した新たな有機硝酸類の一つである APAN (peroxyacryloyl nitrate, $\text{CH}_2=\text{CHC}(\text{O})\text{OONO}_2$) の濃度変動要因や発生源についての考察を発表した。以下、注目すべき研究発表のいくつかを紹介したい。まず一つは、サンフランシスコ郊外の森林地域において生物起源 VOCs 由来の有機硝酸類がこれまでになく高濃度で観測されたことである。陸域生態系が放出する VOCs と光化学過程について我々の理解がまだまだ不完全であることが強く示唆された。植物の葉による有機硝酸類の取り込みがキャノピー内の窒素収支に与える影響を調べた研究も予備的ではあったが興味深い。一方、近年議論が沸き起こっている低分子有機硝酸類の発生源と収支については、海洋起源と二次生成の相対的重要性について活発な議論がなされた。対流圏化学における反応性気体の観測分野では、まだ物質の測定それ自体が困難な状況にあり、新しく開発した高感度・高速応答の測定器を用いて新たな知見を報告した例が目立った。このように、本セッションでは「大気圏」と「(陸域・海洋)生物圏」の境界領域における化学反応や両者間の物質移動(放出・沈着)についても研究が進展しつつあることを強く感じることができた。

余談になるが、私はこれを機会に大気化学の位置取り・地球化学との接点に思いを馳せるに至った。学問的に大気化学は二つの側面を持つ。すなわち、人間圏が自然界に与える摂動を対象にする環境化学的な側面と大気圏を地球システムの一部として捉えた地球化学的な側面である。生物圏や海洋など水圏との相互作用研究は後者の範疇に含まれるだろう。しかし残念ながら現在、日本における反応性気体の対流圏化学研究はその反応性ゆえか後者の視点で行われることが多くない。大気化学を地球科学の一部として捉え直し、地球化学の世界でもっと活発に議論できたらますます楽しく意義深いものになるに違いないと考えている。

2002年度日本地球化学会総会報告

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 野津憲治会長
4. 大会準備委員長挨拶 坂元隼雄会員
5. 議事
 - 1) 2001年度事業報告および決算報告ならびに監査

報告

- 2) 2002年度事業中間報告および決算中間報告
- 3) 2003年度事業計画および予算案
- 4) 名誉会員の推薦
- 5) 各種報告
 - (5.1) 50周年記念事業について
 - (5.2) 地球化学・宇宙化学研連報告
 - (5.3) 2003年度年会について
 - (5.4) Goldschmidt 2003について
 - (5.6) 地球惑星科学関連学会連絡会報告
 - (5.6) その他
6. 会場からの意見提案等
7. 名誉会員証の授与
8. 2002年度日本地球化学会賞・日本地球化学会奨励賞・日本地球化学会功労賞授賞式
 - 1) 日本地球化学会賞 蒲生俊敬会員
「背弧海盆および中央海嶺熱水系の地球化学的研究」
 - 2) 日本地球化学会奨励賞 高橋嘉夫会員
「存在状態の解明に基づく微量元素の地球表層での化学反応に関する研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞 横山祐典会員
「同位体手法に基づく氷期・間氷期の地球環境変動に関する研究」
 - 4) 日本地球化学会功労賞

Mrs. Toshiko, K. Mayeda

「安定同位体による地球化学・宇宙化学の研究への貢献」

9. 閉会宣言

2001年度事業報告

1. 会員状況

2001.1~2001.12

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057	(53)
入会	27	(15)	(12)				27	(2)
退会	25	(21)	(3)	(1:逝去)	2	2:逝去	25	(4)
変更	0	(+20)	(-21)	(+1)			0	(+2)
推挙								
除籍	17	(9)	(8)		1		18	
2001.12	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)

2. 年会、委員会等開催

2001年度地球惑星科学関連学会合同大会 (6 4~6 8; 東京、国立オリンピック記念青少年総合セン

ター), 年会 (10 18~10 20; 東京, 学習院大学学習院創立百周年記念会館), 総会 (10 19; 東京, 学習院大学学習院創立百周年記念会館), 評議員会 4 回 (2 17, 6 9, 10 17, 10 20), 幹事会 3 回 (2 10, 6 2, 10 6), GJ 編集委員会 6 回, 地球化学編集委員会 2 回, 学会賞等受賞者選考委員会 1 回, 鳥居基金委員会 2 回, 将来計画委員会 2 回, 名誉会員推薦委員会 1 回, Goldschmidt 2003 組織委員会 4 回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 35 (1~6)

地球化学 Vol. 35 (1~4)

4. ニュース発行 No. 164 (3 1), 165 (5 30), 166 (8 20), 167 (12 1) (「地球化学」と合本)
5. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞 1 件, 学会賞 2 件, 奨励賞 1 件)
6. 鳥居基金助成: 第 1 回 (海外渡航 2 件), 第 2 回 (海外渡航 1 件, 国内研究集会 1 件)
7. 日産学術助成候補者推薦 (奨励研究 3 件, 日産科学賞 1 件)
8. 21 世紀の地球化学—同位体地球化学の新しい方向を探る (10 19; 東京, 学習院大学学習院創立百周年記念会館)
9. 同位体地球化学ショートコース (10 14~16; 神奈川県葉山, 生産性国際交流センター, 47 名 (講師 2 名含む))
10. 学会などの共催 5 件, 後援 3 件, 協賛 4 件
 - ・ 第 4 回 国際土壌・地下水環境ワークショップ (1 19; 東京商工会議所大ホール) 後援
 - ・ 第 39 回 原子力総合シンポジウム (5 15~16; 内幸町ホール) 共催
 - ・ 第 49 回 質量分析総合討論会 (2001) (6 18~20; 東大安田講堂・山上会館) 共催
 - ・ 第 38 回 理工学における同位元素・放射線研究発表会 (7 11~13; 日本青年館) 共催
 - ・ 第 1 回 国際アイソトポマーシンポジウム (7 23~26; 横浜シンポジア) 後援
 - ・ 第 6 回 国際エコロジャイト会議 (9 1~7; 愛媛) 後援
 - ・ 第 45 回 粘土科学討論会 (9 13~14; 東洋大朝霞キャンパス) 共催
 - ・ 同位体地球化学ショートコース (10 14~16; 神奈川県葉山町湘南国際村) 共催
 - ・ 第 6 回 地球汚染物質としての水銀に関する国際会

議 (10 15~19; 水俣市文化会館) 協賛

- ・ ESR 放射線量計測と年代測定の新戦略 (国際シンポジウム) 兼, 第 17 回 ESR 応用計測研究発表会 (10 25~27; 阪大基礎工学部シグマホール) 協賛
- ・ 第 13 回 二次イオン質量分析国際会議 (11 11~16; 奈良) 協賛
- ・ 日本地熱学会平成 13 年学術講演会 (12 3~5; 名大豊田講堂及びシンポジオン) 協賛

2002 年度事業中間報告

2002 年 9 月 27 日

1. 会員状況 (2002 年 7 月 31 日現在)

2001.1~2001.12

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)
入会	27	(15)	(12)		1		28	(1)
退会	33	(31)	(2)				33	(2)
	うち遷去?							
変更	0	(+4)	(-8)	(+4)			0	
推挙								
除籍								
2002.7	1006	(893)	(102)	(11)	17	9	1032	(52)

2. 年会, 委員会などの開催

2002 年度地球惑星科学関連学会合同大会 (5 27~31; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター), 年会 (9 26~9 28; 鹿児島, 鹿児島大学郡元キャンパス), 総会 (9 27; 鹿児島, 鹿児島大学郡元キャンパス稲盛記念会館), 創立 50 周年記念公開講演会 (9 25; 鹿児島, 鹿児島大学稲盛会館), 50 周年記念講演 (9 27; 鹿児島, 鹿児島大学稲盛会館), 50 周年記念顕彰 (9 27; 鹿児島, 鹿児島大学稲盛会館), 評議員会 3 回 (2 16, 6 9, 9 25), 幹事会 3 回 (2 9, 6 1, 9 14), GJ 編集委員会 4 回, 地球化学編集委員会 1 回, 学会賞等受賞者選考委員会 1 回, 鳥居基金委員会 2 回, 50 周年記念事業実行委員会 1 回, 名誉会員推薦委員会 1 回, Goldschmidt 2003 組織委員会 1 回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 36 (1~4)

地球化学 Vol. 36 (1~3)

4. ニュース発行 No. 168 (2 8), 169 (6 1), 170 (8 1) (「地球化学」と合本)
5. ホームページ・メールニュース・独自ドメイン

6. 日本地球化学会賞等の授与（学会賞 1 件，奨励賞 2 件，功労賞 1 件）
7. 鳥居基金助成：第 1 回（海外渡航 2 件），第 2 回（国内研究集会 2 件）
8. 学会などの共催 5 件，協賛 1 件
 - ・第 40 回原子力総合シンポジウム（5 21～22；千代田区立内幸町ホール）共催
 - ・第 4 回国際ガスハイドレート会議（5 19～23；横浜シンポジア）協賛
 - ・2002 年度 Western Pacific Geophysical Meeting（7 9～12；Wellington, NZ）共催
 - ・第 4 回国際レルゾライト会議（8 26～9 3；北海道様似町）共催
 - ・Chemical Abstracts 利用講習会（9 3～9 12；（社）化学情報協会中居ビル）共催
 - ・第 46 回粘土科学討論会（9 19～9 20；東北大学大学院農学研究科講義棟）共催

2003 年度事業計画

2002 年 9 月 27 日

1. 年会（9 月中旬；倉敷，くらしき作陽大学）
2. 総会（年会期間中；倉敷，くらしき作陽大学）
地球惑星科学関連学会 2002 年合同大会（5 26～29；幕張メッセ）
3. 評議員会 3 回
4. 幹事会 3 回
5. 会誌発行
Geochemical Journal Vol. 37（1～6）
地球化学 Vol. 37（1～4）
6. ニュース発行 No. 172, 173, 174, 175
7. Goldschmidt Conference 2003 年日本開催準備
8. 「地球化学講座」の出版
9. 日本地球化学会賞等の授与
10. 鳥居基金助成，2 回
11. 日本地球化学会創立 50 周年記念事業（公開講演会開催ほか）
12. 学会などの共催 1 件，後援 1 件，協賛 1 件
 - ・第 8 回大気科学とその大気質への応用国際会議（3 11～13；つくば国際会議場）後援
 - ・第 23 回国際側地球・地球物理学連合 2003 年総会共催
 - ・第 16 回国際環境生物地球化学シンポジウム（9 1～9 6）協賛

2003 年度日本地球化学会総会報告

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶 野津憲治会長
4. 大会実行委員長挨拶 田中 剛副会長
5. 議事
 - 1) 2002 年度事業報告および決算報告並びに監査報告
 - 2) 2003 年度事業中間報告および中間決算報告
 - 3) 2004 年度事業計画および予算案
 - 4) 各種報告
 - (4-1) 地球化学・宇宙化学研連報告
 - (4-2) 2004 年度年会について
 - (4-3) Goldschmidt 2003 について
 - (4-4) 地球惑星科学関連学会連絡会報告
 - (4-5) 会費滞納者の取り扱いについて
 - (4-6) 2004～2005 役員選挙結果報告
 - (4-7) その他
 - 5) 会場からの意見提案等
6. 学会ロゴの発表
7. 2003 年度日本地球化学会賞・日本地球化学会奨励賞授賞式
 - 1) 日本地球化学会賞 兼岡一郎会員
「希ガスによるマンツルの化学的構造に関する研究」
 - 2) 日本地球化学会奨励賞 柴田智郎会員
「シリケート中の希ガス溶解度の研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞 松本 潔会員
「大気エアロゾルとその気候への影響予測に関する地球化学的研究」
 - 4) 日本地球化学会奨励賞 渡邊 剛会員
「生物源炭酸塩の同位体比および微量元素を用いた高解像度古環境解析に関する研究」
 - 5) Geochemical Journal 論文賞
Nicolas Dauphas 氏, Laurie Reisberg 氏, Bernard Marty 氏
「An alternative explanation for the distribution of highly siderophile elements in the Earth, Vol. 36, No. 5, 409-419 (2002)」
8. 閉会宣言

2002年度事業報告

1. 会員状況

2002.1～2002.12

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)
入会	39	(23)	(16)		1		40	(2)
退会	36	(34)	(2)				36	(2)
	うち過去5							
変更	-4	(+5)	(-11)	(+2)		+4	0	(+2)
推挙								
除籍	14	(7)	(7)				14	
2001.12	997	(892)	(96)	(9)	17	13	1027	(55)

2. 年会, 委員会等開催

2001年度地球惑星科学関連学会合同大会 (5 27～5 31; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター), 年会 (9 26～9 28; 鹿児島, 鹿児島大学郡元キャンパス), 総会 (9 27; 鹿児島, 鹿児島大学郡元キャンパス), 評議員会 4 回 (2 16, 6 8, 10 25), 幹事会 3 回 (2 9, 6 1, 9 14), GJ 編集委員会 6 回, 地球化学編集委員会 2 回, 学会賞等受賞者選考委員会 1 回, 鳥居基金委員会 2 回, 将来計画委員会 2 回, 名誉会員推薦委員会 1 回, Goldschmidt 2003 組織委員会 3 回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol.36 (1～6)

地球化学 Vol.36 (1～4)

4. ニュース発行 No.168 (2 8), 169 (6 1), 170 (8 1), 171 (12 15) (「地球化学」と合本)

5. 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞 1 件, 学会賞 1 件, 奨励賞 2 件)

6. 鳥居基金助成: 第 1 回 (海外渡航 2 件), 第 2 回 (国内研究集会 2 件)

7. 創立50周年記念事業: 記念講演, 記念顕彰 (9 27; 鹿児島大学稲盛会館)

8. ホームページ・メールニュース・独自ドメイン

9. 学会などの共催 8 件, 協賛 3 件

・「第50回質量分析総合討論会 (2002)」(5 15～17; 京都工芸繊維大学) 共催

・「地球惑星関連学会2002年合同大会」(5 27～31; 東京, 国立オリンピック記念青少年総合センター) 共催・協賛

・「第39回理工学における同位元素・放射線研究発表会」(7 3～5; 日本青年館) 共催

・「第40回原子力総合シンポジウム」(5 21～22; 千

代田区立内幸町ホール) 共催

・「第4回国際ガスハイドレート会議」(5 19～23; 横浜シンポジア) 協賛

・「2002年度 Western Pacific Geophysical Meeting」(7 9～12; Wellington, NZ) 共催

・「第4回国際レルズライト会議 (8 26～9 3; 北海道様似町)」共催

・「Chemical Abstracts 利用講習会 (9 3～12; 社化学情報協会中居ビル)」共催

・「第46回粘土科学討論会 (9 19～20; 東北大学大学院農学研究科講義棟)」共催

・「日本地熱学会平成14年学術講演会」(11 20～22; 産業技術総合研究所臨海副都心センター) 協賛

2003年度事業中間報告

1. 会員状況 (2003年7月現在)

2003.1～2003.7

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2003.1	997	(892)	(96)	(9)	17	13	1027	(55)
入会	57	(13)	(44)				57	(1)
退会	32	(29)	(3)		4		36	
	うち過去5							
変更		(+9)	(-9)				0	(-2)
2003.7	1022	(885)	(128)	(9)	13	13	1048	(54)

除籍者の取り扱いについて

第2回評議員会にて会員除名の条件について審議を行った。滞納期限を5年から2年に短縮とする。会費督促のメモは同封しない。当該年度の3回目の請求の際に退会の方法などを示す。会則の変更はしない。

2. 年会, 委員会などの開催

2003年度地球惑星科学関連学会合同大会 (5 26～29; 千葉, 幕張メッセ国際会議場), 年会 (9 7; 倉敷, くらしき作陽大学), 総会 (9 7; 倉敷, くらしき作陽大学), 世界の海洋に学ぶ瀬戸内海の問題 (9 7; 倉敷, くらしき作陽大学), 評議員会 3 回 (2 8, 5 17, 9 6), 幹事会 3 回 (2 1, 5 10, 8 30), GJ 編集委員会 4 回, 地球化学編集委員会 1 回, 学会賞等受賞者選考委員会 1 回, 鳥居基金委員会 2 回, 名誉会員推薦委員会 1 回, Goldschmidt 2003組織委員会 1 回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol.37 (1～4)

地球化学 Vol.37 (1~3), 特別号

4. ニュース発行 No.172 (2 1), 173 (5 24), 174 (7 15) (「地球化学」と合本)
5. 日本地球化学会賞等の授与 (学会賞 1 件, 奨励賞 3 件)
6. GJ 賞の授与 (1 件)
7. 鳥居基金助成: 第 1 回 (海外渡航 1 件), 第 2 回 (海外渡航 1 件, 国内研究集会 2 件)
8. 学会などの共催 8 件, 後援 4 件, 協賛 3 件
 - ・「第 6 回国際土壌・地下水環境ワークショップ」(1 22; 東京) 後援
 - ・「Chemical Abstracts 利用法講習会」(2003 2 13, 3 11) 共催
 - ・「第 8 回大気科学とその大気質への応用国際会議」(3 11~13; つくば国際会議場) 後援
 - ・「第 51 回質量分析総合討論会 (2003)」(2003 5 14 ~16, 東大安田講堂・山上会館) 共催
 - ・「第 41 回原子力総合シンポジウム」(5 20~21) 共催
 - ・「地球惑星関連学会 2003 年合同大会 (5 26~29; 幕張メッセ) 共催・協賛
 - ・「第 9 回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」(2003 6 19~20; つくば) 後援
 - ・陸水学会「National Report」分担金 30,000 円, Water Quarity を担当
 - ・「第 23 回国際測地学・地球物理学連合 IUGG 2003 年総会」(6 30~7 11; 札幌) 共催
 - ・「第 40 回理工学における同位元素・放射線研究発表会」(7 9~11; 日本青年館) 共催
 - ・「ゴールドシュミット国際会議記念・市民講演会, 地球と生命のふしぎ」(8 24; 倉敷), 共催
 - ・「第 16 回国際環境生物地球化学シンポジウム」(9 1~9 6, 奥入瀬) 協賛
 - ・「ハットンシンポジウム」(9 2~6; 豊橋) 後援
 - ・「ゴールドシュミット国際会議」(9 7~12; くらしき作陽大学) 主催
 - ・「第 47 回粘土科学討論会」(9 24~26; 広島大学) 共催
 - ・「日本地熱学会平成 15 年学術講演会 (11 21~23; 宮城県仙台国際センター) 協賛

2004 年度事業計画

1. 年会 (9 20~22; 静岡, 静岡大学大谷キャンパス)

2. 総会 (9 21; 静岡, 静岡大学大谷キャンパス)
3. 地球惑星科学関連学会 2004 年合同大会 (5 9~13; 幕張メッセ)
4. 評議員会 3 回
5. 幹事会 3 回
6. 会誌発行
Geochemical Journal Vol.38 (1~6)
地球化学 Vol.38 (1~4)
7. ニュース発行 No.176, 177, 178, 179
8. 「地球化学講座」の出版
9. 日本地球化学会賞等の授与
10. 鳥居基金助成, 2 回
11. 日本地球化学会創立 50 周年記念事業 (公開講演会 開催ほか)
12. 学会などの共催 2 件, 協賛 1 件
 - ・第 14 回大気化学シンポジウム (1 7~9; 愛知県豊川市民プラザ) 共催
 - ・地球惑星関連学会 2004 年合同大会 (5 9~13; 幕張メッセ) 共催・協賛

2004~2005 年度役員選挙結果報告

有効投票総数 177 票

● 会長				
当選	田中 剛	次点	松田准一	
● 副会長				
当選	松田准一	次点	5 名	
● 監事				
当選	脇田 宏	次点	野津憲治	
● 評議員				
当選				
(北海道)	河村公隆	南川雅男		
(東北)	北 逸郎*			
(関東)	赤木 右	海老原充	鍵 裕之	
	川幡穂高	木多紀子	佐野有司	
	中井俊一	長尾敬介	奈良岡浩	
	坂本尚義	横内陽子	米田成一	
(中部)	増澤敏行	山本鋼志	和田秀樹	
(近畿)	宗林由樹			
(中国・四国)	清水 洋	千葉 仁		
(九州)	村江達士*			
次点	植田千秋			

*役員選出細則第 6 条(2)2 による

2002年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時：2002年9月25日(水) 17:00~21:30

場所：鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟101号教室

田中剛副会長、植松光夫、鍵裕之、蒲生俊敬、川幡穂高、北逸郎、坂田将、坂元隼雄、佐竹洋、清水洋、長尾敬介、奈良岡浩、米田成一、野尻幸宏、乗木新一郎、益田晴恵、松田准一、松久幸敬、坂本尚義、和田秀樹（以上評議員）

1. 2002年度第2回評議員会議事録の承認

2. 報告事項

2.1 庶務（鍵幹事）：【庶務一般】合同学会プログラム委員に鈴木勝彦会員（正）、角皆潤会員（副）を選出した。学会用の封筒を作成した。【日本学術振興会】平成15年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公開促進費」（学術定期刊行物）公募要領公開【研究助成等】2002年度第2回鳥居基金助成の募集（締切：7.31）【後援・共催等】「日本地球化学会公開セミナー」、「IUGG 2003」（2003.6.30~7.11、札幌）開催のための準備・運営に関する合意書に調印、「日本希土類学会希土類国際会議」（2004.11奈良）協賛、「第8回大気化学とその大気質への応用国際会議（ASAAQ 2003）」（2003.3.11~13、つくば）後援、Chemical Abstracts 利用法講習会（主催：化学情報協会）、「第4回東京湾海洋環境シンポジウム」共催。【その他】第2回幹事を9月14日開催（出席：野津、松田、和田、奈良岡、植松、鍵）、第3回評議員会議事内容の整理。

2.2 会員（植松幹事）：なし

2.3 会計（奈良岡幹事）：なし

2.4 編集

2.4.1 GJ（松田幹事）：Vol.36, No.3, 4を発行した。Vol.36, No.5は論文数9,136ページで10月に完成予定。No.5までで526ページとなり、ページ数が増え、予算を若干超過する可能性が高い。ヨーロッパ、中国からの投稿が増えている。2001年度のインパクトファクターは0.723で2000年度の0.908よりも減少した。要因については不明であるが1999年度の0.683よりも高い値である。日本学術振興会に対してページ数の増加について確認をとる。

2.4.2 地球化学（蒲生幹事）：36巻3号を2002年8月

に発行した（報文2、受賞記念論文1）。36巻4号は2002年12月発行予定。2002年1月1日から9月18日までの投稿論文総数は8編。投稿論文数は減少傾向にある。日本地球化学会50周年記念特集号への原稿を依頼した。

2.4.3 ニュース・ホームページ（米田ニュース幹事）：ニュースNo.170はVol.36, No.3に綴じ込みで8月上旬に会員に発送済み。No.171は10月末原稿締切、12月初旬発行の予定。ホームページでの年会講演受付において、使用するコンピュータの環境によっては確認のボタンが反応しないという不具合が生じた。参加予約申し込み受付に関しては不具合の報告は受けていない。日本地球化学会ニュース（電子メール版No.1）を学会名簿に電子メールを登録している全会員に発信した。科学技術振興事業団（JST）提供のJ-STAGEによる講演申し込みの受付テストを行った。来年度はこちらのシステムで年会申し込みを行いたい。ML（メーリングリスト）に情報を流す場合はニュース担当米田幹事に依頼してほしい。

2.5 行事

2.5.1 2002年度年会（坂元評議員）：開催状況について報告された。50周年記念公開講演会の出席者は50人程度で、活発な質疑がなされた。

2.5.2 2003年度年会（田中副会長）：名古屋大学が担当する。年会中にアンケートを実施する。基本的にはポスター講演に限定し、総会、授賞式関係を行う。受賞講演はGoldschmidt Conferenceに組み込む予定である。

2.5.3 2004年年会（和田幹事）：琉球大学で徳山会員が中心に準備を進めている。

2.5.4 2002年度地球惑星科学関連学会合同大会（清水評議員）：合同学会のスケジュール、場所、登録料の変更について報告された。

2.5.5 Goldschmidt 2002（松久評議員）：8.18~23にスイス、ダボスで開催された。会議の状況などが報告された。

2.6 委員会

2.6.1 鳥居基金委員会（益田評議員）：2002年度後期申請に対して2件の応募があり、集会2件を採択した。第15回海洋物質循環セミナー（小笠恒夫）、地球化学若手会（奈良英樹）。

2.6.2 50周年記念事業実行委員会（田中副会長）：年会における特別講演と顕彰の予定などを報告した。

2.6.3 地球化学講座編集（松久評議員）：地球化学講座の編集状況について報告された。すでに原稿を出された方の内容が古くなってしまう危惧もあり、早急に原稿を完成して欲しい旨要請された。

2.6.4 Goldschmidt 2003組織（松久評議員）：準備状況などが報告された。

2.7 学術会議

2.7.1 地球化学・宇宙化学研連，海洋科学研連，陸水研連，鉱物学研連鉱床学専門，地球物理学研連惑星科学専門：配布された議事録などにより簡単な報告があった。

2.8 連絡会等

2.8.1 地球惑星科学関連学会連絡会（清水評議員）：2004年から合同学会の大会委員長は各学会の代表で出される連絡会の会長が兼ねることが決まった。2003年度は清水連絡会会長が兼任する。

2.8.2 学校科目「地学」関連学会連絡協議会（植松幹事，代理鍵幹事）：地球環境科学関連学会協議会，初等地学教育の必要性について地球化学の立場で議論し，検討委員会を発足するよう要望が出された。幹事会に一任された。

2.9 その他

2003年度はゴールドシュミット会議（9.7～12）とジョイントして総会を開催する必要があるため，評議員選挙，会員名簿号発行などのスケジュールを例年より繰り上げて予定する必要がある。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認（植松幹事）：

会員異動（2002.5.1～2002.7.31）

【入会】正会員17名（一般正会員10名，学生会員7名），賛助会員1件

（5月）

2209 新垣雄光 ARAKAKI Takemitsu
琉球大学理学部

2210賛 海洋科学技術センター情報業務部情報業務課
吉村 悟

2211 山中 勝 YAMANAKA Masaru
立正大学地球環境科学部

2212 半澤有希子 HANZAWA Yukiko
日本原子力研究所環境科学研究部陸域環境研究グループ

（6月）

2213学 奈良英樹 NARA Hideki
東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻

2214学 玉置美奈子 TAMAKI Minako
総合研究大学院大学数物科学研究科極域科学専攻

2215学 西澤 学 NISHIZAWA Manabu
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

2216 鍋谷 淳 NABETANI Atsushi
国際石油開発株探鉱第1部・第2部

2217 澤 庸介 SAWA Yousuke
気象研究所

2218 藤村弘行 FUJIMURA Hiroyuki
琉球大学理学部海洋自然科学科

2219学 野口真弓 NOGUCHI Mayumi
日本大学大学院総合基礎科学研究科相関理化学専攻放射化学研究室

2220学 北田幸男 KITADA Yukio
琉球大学大学院理工学研究科海洋自然科学専攻

（7月）

2221 宮崎 隆 MIYAZAKI Takashi
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設

2222 対馬孝治 TSUSHIMA Kouj
東京農工大学農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター

2223 羽生 毅 HANYU Takeshi
海洋科学技術センター固体地球統合フロンティア研究システム

2224 野本信也 NOMOTO Shinya
筑波大学化学系

2225学 下川原 誠 SHIMOKAWARA Makoto
東海大学海洋学部

2226学 池田堅一郎 IKEDA Kenichiro
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻

【退会】0名

【変更】0467 正→シニア 佐藤和郎

0549 正→シニア 杉原 健

2002年7月31日現在の会員数

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2002.4	989	(881)	(99)	(9)	16	9	1014	(51)
入会	17	(10)	(7)		1		18	
退会							0	
変更		(+2)	(-4)	(+2)			0	(+1)
推挙								
除籍								
2002.7	1006	(893)	(102)	(11)	17	9	1032	(52)

2001.1～2001.12

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2001.1	1027	(900)	(120)	(7)	19	11	1057	(53)
入会	27	(15)	(12)				27	(2)
退会	25	(21)	(3)	(1)逝去	2	2	25	(4)
変更	0	(+20)	(-21)	(+1)			0	(+2)
推挙								
除籍	17	(9)	(8)		1		18	
2001.12	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)

2002.1～2002.7

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2002.1	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)
入会	27	(15)	(12)		1		28	(1)
退会	33	(31)	(2)				33	(2)
		うち逝去2						
変更	0	(+4)	(-8)	(+4)			0	
推挙								
除籍								
2002.7	1006	(893)	(102)	(11)	17	9	1032	(52)

3.2 会費滞納者の除籍について(植松幹事)：除籍対象者16名について審議した。うち1名については本人と連絡を取り滞納分を支払うことで会員に復帰することとなった。

3.3 2003年度予算案(奈良岡幹事)：2003年度予算案が報告され、承認された。

3.4 学会賞等受賞者選考委員会委員の選出：2003年度の学会賞等受賞者選考委員会委員として、蒲生俊敬幹事、松田准一幹事、松久幸敬評議員の3名を選挙により選出した(次点：佐野有司評議員、長尾敬介評議員(同票))。(留任委員：野崎義行評議員、日下部実評議員)また、2003年度選考委員会委員長を蒲生幹事に委嘱した。

3.5 2003年度鳥居基金委員会委員の選出：2003～2005年度鳥居基金委員会委員として長尾敬介評議員

を選出した(次点：北逸郎評議員)。留任は益田晴恵評議員(2003年度まで)、清水洋評議員(2004年度まで)。また、2003年度委員長を清水評議員に委嘱した。

3.6 2002年度総会議事次第及び提出議案について：2002年度総会の議事内容を整理し、議事次第を決めた。次いで同総会に提出する議案として、2001年度事業報告および決算報告ならびに監査報告、2002年度事業中間報告および会計中間報告、2003年度事業計画および予算案を審議し、承認した。

3.7 ニュース、ホームページ関連：要旨集のJ-STAGEでの公開が承認され、来年度試験的に進めることとなった。地球化学ニュースを電子雑誌の一つとしてデータ収集・保存して国立国会図書館関西館のサーバー上で利用提供することが承認された。

3.8 日本地球化学会ロゴ：和田幹事が中心になって学会のロゴを考案することとなった。

4. 次回以降の評議員会の日程(予定)

2003年度第1回評議員会は2月上旬に開催予定。

2003年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：2003年2月8日(土) 13:00～17:00

場所：東京大学山上会館002会議室

出席者：野津憲治会長、田中剛副会長、脇田宏監事、植松光夫、鍵裕之、蒲生俊敬、奈良岡浩(以上幹事)、石橋純一郎、川幡穂高、北逸郎、坂元隼雄、佐竹洋、佐野有司、篠原宏志、富樫茂子、長尾敬介、野尻幸宏、乗木新一郎、益田晴恵、松久幸敬、坂本尚義(以上評議員)

野崎評議員逝去に伴う措置

評議員は次点の高田秀重会員(任期1年)に委嘱
学会賞選考委員佐野評議員(任期1年)
学術会議海洋科学研連は本評議員会で投票を行う

1. 2002年度第3回評議員会議事録の承認

2. 報告事項

2.1 庶務(鍵幹事)：【庶務一般】学会賞等受賞候補者推薦依頼公示(締切2003.1.31)柴田賞1件、学会賞3件、奨励賞3件→蒲生委員長へ；「地球化学」Vol.37の広告依頼(2003.2.14締め切り、現在3件)学会事務センターとの契約；野崎義行会員の

- 逝去にあたり、生花（会計より）と弔電（庶務費より）を学会から手配した【日本学術振興会】平成15年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（学術定期刊行物 GJ）申請（2002.11.20）；平成14年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」（学術定期刊行物 GJ）の実績報告書を提出（2003.1.28）
- 【研究助成等】2003年度第1回鳥居基金助成の募集（締切2003.1.31、ニュース・HPに掲載）1件（海外渡航）→清水委員長へ【学術会議】第19期日本学術会議会員の候補者及び推薦人の届け出に関する書式を受領；第19期日本学術会議会員の候補者及び推薦人の届け出に関する説明会（2003.2.14予定）【後援・共催等】「第9回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」（2003.6.19～20、つくば）後援；「第41回原子力総合シンポジウム」（2003.5.20～21）共催、共催金5,000円；陸水学会「National Report」分担金30,000円、Water Qualityを担当；「Chemical Abstracts 利用法講習会」（2003.2.13、3.11）共催；「第51回質量分析総合討論会（2003）」（2003.5.14～16、東大安田講堂・山上会館）共催；IUGG アウトリーチへの協力；「第6回国際土壌・地下水環境ワークショップ」（2003.1.22、東京）後援、招待【幹事会】2003年2月1日13：00～17：00に東京大学山上会館203室で開催した。出席者：野津会長、田中副会長、植松、奈良岡、蒲生、松田、米田、和田、鍵各幹事。第1回評議員会の議事内容について整理した。
- 2.2 会員（植松幹事）：会員名簿の作成準備状況、特に2003年度会員原簿調査カードのアンケート項目（案）などについて報告された。
- 2.3 会計（奈良岡幹事）：特になし
- 2.4 編集
- 2.4.1 GJ（松田幹事・出版関係を含む）：Vol. 36, No. 5, 6を発行した。ページ数はそれぞれ136ページ、58ページ。野崎評議員の特別号を2004年発行を目指して準備する。佐野評議員と植松評議員がエディターとなる。
- 2.4.2 地球化学（蒲生幹事）：36巻4号を2002年12月に発行した。原著論文2編、総説1編である。昨年の総原稿数は19編でこのうち7編は50周年特別号のための寄稿である。総ページ数は189ページでほぼ横ばいである。
- 2.4.3 ニュース／ホームページ（米田ニュース幹事・ホームページを含む）：No. 171を12月下旬に発送済み。昨年の年会の講演抄録を科学技術振興事業団提供のJ-STAGE上で公開する準備が整った。
- 2.5 行事
- 2.5.1 2002年度年会（坂元評議員）：第49回年会の最終報告がなされた。年会の財政状況はたいへん良好で、40万円が学会に還元された。
- 2.5.2 2003年度年会（田中副会長）：倉敷でポスター中心で開かれる。申し込みはHPを介して行う。懇親会の有無など詳細を検討中である。
- 2.5.3 2004年度年会：静岡大学で準備中。火山学会と同時期に開催される。
- 2.5.4 2005年度年会：関西方面で打診中である
- 2.5.5 2003年度地球惑星科学関連学会合同大会：幕張メッセにて5月26日から29日までの予定で開催される。地球化学会関連で2セッション開かれる。
- 2.6 委員会
- 2.6.1 学会賞等受賞者選考（蒲生幹事）：2003年度の各賞受賞候補者として柴田賞1名、学会賞3名、奨励賞3名の推薦があった。
- 2.6.2 名誉会員推薦（田中副会長）：総会で名誉会員に推挙された酒井会員、小嶋会員、一國会員、増田会員のニュースへの紹介文を松葉谷会員、柴田会員、高野会員、増田研卒業生に依頼した。
- 2.6.3 鳥居基金（益田評議員）：海外渡航1件の応募があり2月末までに審査を終了する。
- 2.6.4 50周年記念事業（田中副会長）：地球化学記念号、学会ロゴマーク、GJのCD-ROM化などが進行中である。
- 2.6.5 地球化学書編集：編集状況が報告された。まもなく第3巻の印刷が始める予定である
- 2.6.6 Goldschmidt 2003組織（松久評議員）：2ndサーキュラーに基づいて準備状況が報告された。登録料、投稿料などの概略などが説明された。学会ホームページの英語版を早急に整備する必要がある。
- 2.7 学術会議
- 2.7.1 地球化学・宇宙化学研連（田中評議員）：第18期第6回委員会が2002年11月14日に開かれた。配布された議事録などにより簡単な報告があった。
- 2.8 連絡会等
- 2.8.1 地球惑星科学関連学会連絡会（清水評議員、代理鍵幹事）：次の連絡会は2003年度合同大会時に開催される予定。
- 2.8.2 学校科目「地学」関連学会連絡協議会（植松

幹事，代理幹事）：2002年9月11日に開催された。配布された議事録などにより簡単な報告があった。

2.9 学会ロゴ募集（和田幹事）：学会ロゴの募集要領などが報告された。

3. 審議事項

3.1 入退会者の承認：2002年8月1日から2002年12月31日までの入退会者を以下の通り承認した（敬称略）。

会員異動（2002.8.1～2002.12.31）

【入会】正会員12名（一般正会員8名（うち海外会員1名），学生会員4名）

（8月）

2227 篠原也寸志 SHINOHARA Yasushi
産業医学総合研究所作業環境計測研究部

2228 柴田誠一 SHIBATA Seichi
京都大学原子炉実験所

2229学 辻 寛之 TSUJI Hiroyuki
北海道大学地球環境科学研究科

2230 常 青 CHANG Qing
海洋科学技術センター

（9月）

2231 宮本知治 MIYAMOTO Tomoharu
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門

（10月）

2232 原 和敬 HARA Kazutaka
応用地質㈱東北支社

（11月）

2233学 平原由香 HIRAHARA Yuka
新潟大学大学院自然科学研究科

（12月）

2234学 勢田明大 SETA Akihiro
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻

2235学 山口裕康 YAMAGUCHI Hiroyasu
北海道大学大学院地球環境科学研究科大気海洋圏環境科学専攻

2236海 堀田十輔 HORITA Juske
Chemical Sci. Div., Oak Ridge Nat'l Lab.

2237 清水直哉 SHIMIZU Naoya
北陽建設㈱地質コンサルタント部長野分室

2239 合原 眞 AIHARA Makoto
福岡女子大学

【退会】正会員3名

辻 康（逝去），宮野 敬（逝去），田崎耕市（逝去）

【除名】正会員14名（一般正会員7名，学生会員7名）

福井深，糸山東一，佐藤賢司，山本茂，島田顕臣，徳永眞由美，田中弘章，富永卓男，高山英男，佐藤純子，松石麻果，松岡賢治，紀岡秀征，馬場直歩

【変更】一般正会員→名誉会員 2名

0491 酒井 均 0151 一國雅巳

シニア会員→名誉会員 2名

0408 小嶋 稔 0283 増田彰正

2002年12月31日現在の会員数

	正会員	（一般正会員）	（学生）	（シニア）	賛助会員	名誉会員	計	（在外）
2002.8	1006	(893)	(102)	(11)	17	9	1032	(52)
入会	12	(8)	(4)				12	(1)
退会	3	(3)					3	
変更	-4	(+1)	(-3)	(-2)		+4	0	(+2)
推挙								
除籍	14	(8)	(7)				14	
2002.12	997	(891)	(96)	(9)	17	13	1027	(55)

	正会員	（一般正会員）	（学生）	（シニア）	賛助会員	名誉会員	計	（在外）
2002.1	1012	(905)	(100)	(7)	16	9	1037	(53)
入会	39	(23)	(16)		1		40	(2)
退会	36	(34)	(2)				36	(2)
		うち逝去						
変更	-4	(+5)	(-11)	(+2)		+4	0	(+2)
推挙								
除籍	14	(7)	(7)				14	
2002.12	997	(891)	(96)	(9)	17	13	1027	(55)

地球化学特別号（会員名簿号）に関して，会員種別の掲載順を検討する。所属のインデックスは掲載しない。添付する会員原簿調査カードの案が承認された。

3.2 平成16年度科学研究費審査委員候補者の選出

【細目「宇宙地球化学」第1段審査委員候補者】（固体地球関係）坂本尚義，富樫茂子，清水洋，長尾敬介，佐野有司，日下部実；（大気水圏生物圏関係）野尻幸宏，乗木新一郎，赤木右，植松光夫，河村公隆，蒲生俊敬，坂田将，奈良岡浩，川幡徳高

【分科「地球惑星科学」第2段審査委員候補者】（固

体地球関係) 清水洋, 野津憲治, 田中剛; (大気水圏生物圏関係) 蒲生俊敬, 河村公隆, 乗木新一郎

【分科「岩石・鉱物・鉱床学」細目「鉱床」第1段審査委員候補者】千葉仁, 鹿園直建, 和田秀樹

【環境関連審査委員候補者】野尻幸宏, 乗木新一郎, 植松光夫, 高田秀重, 蒲生俊敬

3.3 海洋研連委員の選出: 蒲生俊敬 (野崎会員の逝去に伴う補充)

3.4 第19期日本学術会議会員候補者ならびに推薦人の選出

【会員候補者】角皆静男

【推薦人】野津憲治, 佐野有司, 海老原充, 田中剛, 長尾敬介

3.5 2004~2005年度役員選挙管理委員会の発足: 坂田評議員 (委員長), 植松幹事, 富樫評議員に委嘱した。

3.6 その他 (ニュース関連)

年会抄録の電子公開について議論した。そのなかで年会抄録は公開を前提として準備していないので, 昨年度分は公開を見送るべきではないかという意見も出た。題名, 著者のみは公開可能。どうしても昨年度から抄録を載せる場合はそのメリットを示した上で幹事会において検討して欲しい。

要旨の電子投稿は積極的に進める。要旨は公開を前提としていることを明記する。

電子メールのニュースは随時流す。

4. 次回以降の幹事会, 評議員会の日程

第2回幹事会 2003年5月10日

東京大学山上会館

第2回評議員会 2003年5月17日 同上

第3回幹事会 2003年8月30日 同上

第3回評議員会 2003年9月6日 倉敷市内

日本地球化学会総会 2003年9月7日

くらしき作陽大学

新旧合同評議員懇談会 2003年11月29日 未定

第18期海洋科学研究連絡委員会 (第9回) 議事録

日時: 平成15年5月14日(水) 13時45分~16時00分

場所: 日本学術会議 第6会議室

出席者: 西田篤弘, 斎藤常正, 谷口旭, 伊藤絹子, 井内美郎, 平啓介, 角皆静男, 友定彰, 伏見克彦, 前田明夫, 古谷研, 松山優治, 山口征矢, 蒲生俊敬

欠席者: 杉本隆成, 寺崎誠, 灘岡和夫, 西田周平, 松田治, 花輪公雄, 石井春雄, 佐藤義夫

I. 第8回議事録について

事前にメールで回覧し, 必要な修正を施してあった第8回海洋科学研究連絡委員会 (平成15年3月11日開催) の議事録案を承認した。

II. 協議事項

通例の議事進行とは異なり, 今回の議事は協議事項のうち平成16年度科研費審査委員候補者の選出を最初に行って, その後報告事項と残りの協議事項について討議した。

(1) 科学研究費補助金審査委員候補者の推薦について (谷口委員長)

各学会 (日本海洋学会, 日本水産学会, 日本地質学会, 日本プランクトン学会, 水産海洋学会, 日本海水学会, 日本地球化学会, 日仏海洋学会, 日本気象学会, 土木学会) から推薦されてきた平成16年度科研費審査委員候補者リストをもとに, 本研連として, 細目「環境影響評価」分割A (窓口研連は自然保護研連) の一段審査委員に2名, 細目「環境動態解析」(窓口研連は地球物理研連) の一段審査委員に4名, 二段審査委員に3名を推薦することとした。

この議事に関連して, 日本学術振興会監事である平委員から, 今年度学振に新設された学術システム研究センターが平成17年度以降の科学研究費補助金の審査・評価事業に関わることを行うことについて, その概要が紹介された。新制度は, 文部科学省が科学技術・学術審議会学術分科会の答申を受けて全米科学財団 (NSF) の方式に倣って導入するので, 同センターに常勤と非常勤の研究員を配置して, NSFのProgram DirectorやProgram Managerと同等の作業を担当させるというものである。最終的には計80名 (15年度は40名) が配置されて10名ずつからなる班を編成し, 九つに纏められる科研費全細目のいずれかを担当する。その研究員の任用方法も, 国立大学が法人化すればNSF方式になる計画である。

この紹介を受けて, 300以上に達する全細目・分割を非常勤者が大半を占める80名で担当することで遺漏を生じないかという疑念, 膨大数に上であろうピアレビューアの候補者リストの準備に研連や

学協会がどのように関わる見通しであるかという関心などが表明された。また、第9番目の「総合・複合新領域専門調査班」の担当研究員を第1から第8の専門調査班研究員が「併任する」とされている点に関して、新領域の研究の創出や発展を目的として今年度から重点的に拡充強化した総合新領域系であったのにもかかわらず、その審査、配分、評価を既往分野における研究員の「併任」に委ねるとするのは矛盾であり、複合領域研連である本研連としては、学術振興会においてこの点を今後十分に検討するよう要望するべきであるという意見が出された。

Ⅲ. 報告事項

(1) 日本学術会議関連（斎藤委員）

「日本学術会議の在り方について」、日本学術会議改革推進委員会の審議経過の概要が説明された。会員数は現行のまま210名を基本として、部の構成を現行の7部制から3部制（人文社会系、生命系、理工系）へ改組する。会員および連携会員の定年を70歳と定め、任期を現行の3年から6年へ変え、3年ごとに半数改選する。現行の研連委員数2,370名を基本として連携会員が任命され、現行の研究連絡員会に替わって設けられる「課題別委員会」を担当するなどの審議内容が紹介された。

これに対して、研連を廃止して1,400に達する学協会との連帯をどう確保するか、国際学術団体対応のNational Committee機能をどう果たすかなど、具体的な構想がまだできておらず、その点に関する検討が不十分である。また、構想されている3部制には総合新領域が欠けており、強化領域として重要視されている領域が軽視されていることは問題であるという意見が出され、今回の総会期間にこの点をただすことを了承した。

(2) 第18期における活動の総括と第19期研連への申し送りについて（谷口委員長）

第18期には、次の4項目の活動方針を掲げて活動してきた。

- ①海洋科学の教育と研究の振興について引き続き審議する。
- ②「海洋科学研究・教育のための船舶運営機構に関する検討小委員会（略称：練習船小委）」を継続設置し、今期中に「海洋教育研究のための船舶不足と水産系大学練習船の今後について（仮題）」の対外報告を取りまとめる。

③SCORの第26回総会を平成14年秋に日本において開催する。

④文部省科学研究費補助金複合域細目「環境保全」の審査員候補推薦作業のルールを作る。

今日までに、これらの方針に沿った活動を実際に行うことができ、今期の目標は達成できたと判断され、その旨を自己評価票に取りまとめて報告した。一方、科研費の審査や採択で海洋科学が正当に評価されたか否かが定かではないこと、学術会議や学振の学術システム研究センターの将来構想などでは複合領域が正当な処遇を受けていないように見えることなどに鑑みて、次期研連では海洋科学のあり方を検討するよう申し送ってはどうかという意見が出され、今回の委員会で協議することとした。

(3) 東京海洋大学について（松山委員）

本年10月1日に東京水産大学と東京商船大学とが統合合併して東京海洋大学となることが、4月16日に公式決定された。本部は品川キャンパス（現東京水産大学）におかれる。学部は海洋科学部（海洋環境学、海洋生物資源学、海洋食品科学海洋政策文化の4学科）と海洋工学部（海事システム工学、海洋電子機械工学流通情報工学の3学科）の2学部で、学生定員は合計450名である。大学院は海洋科学技術研究科の1研究科で、前期課程は海洋生命科学、食機能保全科学、海洋環境保全学、海洋システム工学、海運ロジスティクスの5専攻で学生定員は170名、後期課程は応用生命科学と応用環境システム学の2専攻で学生定員は38名である。すでに創設準備委員会が設置されており、新大学発足に向けて着々と準備が進んでいる。

次回は2003年7月14日(水) 13時30分～開催の予定。

（議事録作成・伊藤絹子）

第18期海洋科学研究連絡委員会 （第10回）議事録

日時：平成15年7月14日(月) 13時30分～16時30分

場所：日本学術会議 第6部会議室

出席者：斎藤常正、谷口旭、伊藤絹子、井内美郎、平啓介、角皆静男、友定彰、杉本隆成、寺崎誠、前田明夫、古谷研、西田周平、花輪公雄、石井春雄、松山優治、山口征矢、佐藤義夫

欠席者：西田篤弘、灘岡和夫、松田治、伏見克彦、蒲

生俊敬

I. 第9回議事録について

事前にメールで回覧し、必要な修正を施してあった第9回海洋科学研究連絡委員会（平成15年5月14日開催）の議事録案について、委員会において再度一部修正の上これを承認した。

II. 報告事項

(1) 日本学術会議関連（谷口委員長）

日本学術会議第139回総会について谷口委員長から以下のような報告があった。

①第18期では「学術の将来に対する提言」について学術会議としての統一見解を提出する予定であったが、十分には論旨の整理ができなかったため、第19期へ引き継がれることになる見通しである。

②「日本学術会議の在り方について」政府案が決定し、日本学術会議法および関連政令等の改正作業が進行しつつあると思われるが、日本学術会議自体の改革推進委員会としても「在り方」の具体化案を鋭意検討しているところである。改革案の概要は、これまでに報告されていたものと大きく変わってはならず、会員数は現行の210名を基本として、部の構成を現行の7部制から3部制（人文社会系、生物生命系、理工系）へ改組する。このなかで生物生命系は、前回までは生命系とされていたものである。会員および連携会員の定年を70歳と定め、任期を現行の3年から6年へ変え、3年ごとに半数改選する。初回の会員は、日本学術会議会員選考委員会を時限設置して選考する。その3年後の二回目以降はco-optationの理念に基づいて、新会員を選考する。現行の研連委員の予算定数を基本として2,370名の連携会員が任命され、研究連絡員会に替わって「課題別委員会（仮称）」が設けられる。

③第19期には、上述の改革基本方針を具体化する実施案の提出が大きな役割になると予想される。政府がそれをどれほど尊重するかは不明であるが、それを受けて法改正に臨むことは間違いないと予想され、法改正が終了すれば、第19期は任期途中で解散し、ただちに第20期、新制度の学術会議へと移行する。現時点では、2004年7月あるいは2005年3月解散の見通しが濃厚といわれている。以上の報告を受け、委員からは、学術会議にとっ

ては学術の将来に関する明確なビジョンを持つことが最も重要であること、また、海洋科学研連にとっては課題別委員会として存続できるように海洋科学の重要性を対外的に訴えることが重要であるという意見などが出された。

(2) 東京大学海洋研究所研究船の移管について（西田周平委員）

(2-1) 西田周平委員から、東京大学海洋研究所の研究船「白鳳丸」と「淡青丸」を海洋科学技術センター（JAMSTEC）を改組して作る独立行政法人海洋研究開発機構に移管することについて、現状の報告があった。今年度になって、研究船の運航および乗組員の処遇の2項目について協議するため、海洋研究所、東大本部、JAMSTEC、文部科学省海洋地球課、同学術機関課の5者間に「研究船移管協議会」が設けられ、すでに4月17日、4月24日および5月19日に3回の会合があった。今後も同協議会の開催を重ねて、共同利用の趣旨に基づく研究船の運行を維持する仕組みを構築していくことになる旨の説明があった。

(2-2) この報告に関連して、平委員より、科学技術・学術審議会海洋開発分科会では新たに「海洋研究船委員会」を設けて本件に関する検討を開始したこと、同委員会には花輪委員と松山委員が専門委員として招かれていることが紹介された。

以上の2報告を受けて、研連委員から、「白鳳丸」と「淡青丸」を移管することにより、同一機関に性格の異なる2種類の船が多数配置されることになるので、初期の目的が誤解を受けて解消されるようなことが起こらないように対策を立てること、これまでの2研究船の性格、すなわち研究者が自発的に各個研究を提案して利用するという性格を将来に亘って維持できることを明記した文書を残すこと、前に本研連と海洋物理学研連、日本海洋学会、水産海洋学会との連名による申し入れ事項のうち文科省研究開発局長が受け入れを表明した項目が「海洋研究船委員会」の最終報告書に記載されるよう努めること、また、今後の検討の過程で求められれば本研連からの意見を述べる準備をしておくことなどが重要であるとの指摘があった。

(3) IOC 総会について（寺崎委員）

6月23日～7月2日にパリのユネスコ本部で開催された第22回政府間海洋学委員会（IOC）総会の概要について寺崎誠委員から報告があった。特にIOC

と SCOR の間で GEO-HAB, IGBP などのプログラムを共同で推進するということの覚書についても、議題にあがり、今後のより緊密な連携が要請された。また総会で WESTPAC 議長を昨年まで 6 年務められ、NEAR-GOOS 計画の立案、実施に尽力のあった平啓介委員に感謝状が贈呈された旨の紹介があった。

(4) IUGG 総会について (花輪委員)

6 月 30 日から 7 月 3 日まで札幌で開催された IUGG 総会について、花輪委員から報告があり、4,600 名の参加があったこと、今回はイタリアで開催予定であることが紹介された。また、IAPSO 総裁に日本から推薦された今脇資郎氏が就任されることになった旨の紹介があった。

Ⅲ. 協議事項

(1) 第 19 期研連への申し送りについて (谷口委員長)

次期研連への申し送りに関して、谷口委員長が提示した原案を基に種々意見交換がなされた。それらの意見をふまえた上で、後日、委員長が改正案を作成して全委員にメールで配信し、それについて意見を交換して決定することを了承した。その手続きを経た結果、最終的に以下の 4 項目を第 19 期研連に申し送ることを承認した。

1. 海洋の物理学、化学、地質学、生物学、環境学にわたる研究と教育の振興について、引き続き審議する。
2. SCOR (Scientific Committee on Oceanic Research: 海洋研究科学委員会) の国内対応体としての責務を果たす。
3. 我国における海洋科学の研究と教育の推進体制確立について審議し、その成果を研連報告として取りまとめるよう務力する。
4. 新生日本学術会議の活動に貢献できる研連をめざして、海洋科学研究連絡委員会の将来計画を検討する。

(議事録作成・伊藤絹子)

東京大学大学院理学系研究科 地殻化学実験施設助教授公募

地殻化学実験施設では下記のとおり助教授を募集することになりました。

なお、地殻化学実験施設は、地殻内に起こる諸現象の化学的解明に必要な諸実験および研究従事者の教育

を行なうことを目的に設置された理学系研究科附属の施設です。

記

1. 職種・人員 助教授・1 名
2. 専門分野 地球化学およびその関連分野。着任後は、化学専攻または地球惑星科学専攻の担当教官として大学院教育を担当する。
3. 応募資格 博士の学位を有し、大学院での研究指導を担当できる方。
4. 着任時期 決定後なるべく早い時期
5. 提出書類
 - (1) 履歴書 (写真添付)
 - (2) 研究業績リスト (「査読あり」および「査読なし」に区分けした論文、著書等の一覧表)
 - (3) 主要論文 5 編の別刷り (コピー可)
 - (4) これまでの研究概要 (A 4 用紙, 2,000 字程度)
 - (5) 着任した場合の研究計画 (A 4 用紙, 2,000 字程度)
 - (6) 意見を伺える方 2 名以内 (氏名、連絡先)
6. 公募締切 平成 15 年 12 月 19 日 (金) (必着)
紛失事故を防ぐため、書留にて郵送のこと。
7. 書類提出先および問い合わせ先
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院理学系研究科
地殻化学実験施設長 長尾敬介
Tel: 03-5841-4621
E-mail: nagao@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp
地殻化学実験施設ホームページ
<http://www.eqchem.s.u-tokyo.ac.jp>

なお、現在の地殻化学実験施設構成員は下記のとおりです。

教授 野津憲治 長尾敬介
助教授 鍵 裕之 (本公募対象ポスト)
助手 森 俊哉 角森史昭 角野浩史

東京大学大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻教官公募

このたび、下記のように教官公募を行いますので、広く適任者の応募、推薦を求めます。

1. 募集人員 助教授 1 名
2. 所属講座 宇宙惑星科学講座

3. 公募分野

宇宙惑星科学分野において実験・観測の手法を通じて広義の惑星科学（惑星間空間，惑星磁気圏，惑星大気，月・惑星，小惑星・隕石およびそれらに関連する分野）の教育・研究に主導的役割を果たすとともに，将来の惑星科学への発展に意欲的に取り組める方。着任後は他の教官（「その他」参照）と協力して宇宙惑星科学の研究，および大学院・学部教育（実験指導を含む）を積極的に推進していただきます。任期は6年程度（任期についての詳細はお問い合わせください）。

4. 着任時期 平成16年4月1日以降出来るだけ早い時期

5. 提出書類

(a)履歴書

(b)これまでの研究概要（1,600字程度）

(c)研究論文リスト（査読付き論文とその他を区別してください）

(d)主な原著論文の別刷またはコピー（5編以内）

(e)今後の研究・教育の計画・抱負（1,600字程度）

(f)自薦の場合は応募者に関して御意見を頂ける方2名の氏名及び連絡先（住所，電話，電子メール）

(g)他薦の場合は，推薦書の他に，前記事項(a)～(d)の概要がわかる書類

6. 応募締切 平成15年12月22日(月) 必着

7. 提出先

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科

地球惑星科学専攻長 浦辺徹郎

Tel：03-5841-4542

E-mail：urabe@eps.s.u-tokyo.ac.jp

8. 問い合わせ先

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科

地球惑星科学専攻 星野真弘

Tel：03-5841-4584

E-mail：hoshino@eps.s.u-tokyo.ac.jp

9. その他

封筒の表に「宇宙惑星科学講座助教授公募書類在中」と朱書きし，簡易書留にてお送りください。

当該講座の教官リストおよび当該講座の概要など，詳しくは当専攻WEB：<http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/jp/>をご覧ください。

筑波大学地球科学系自然学類 地球科学専攻教官公募

このたび下記の要領により，教員を公募することとなりました。

記

1. 職名・人員 地球科学系所属自然学類（地球科学専攻 地球資源科学） 教授1名

2. 採用分野 地球資源科学

3. 採用予定 決定後可能な限り早い時期

4. 応募資格

1) 博士の学位を有すること

2) 地球資源科学分野で，地球惑星進化科学に関する教育・研究に従事できる方

3) 地球資源科学の室内または野外実験の指導ができる方が望ましい

5. 担当予定

1) 自然学類開設科目：地球資源科学，同実験，同演習地球進化学，同実験，その他関連科目

2) 生命環境科学研究科・地球進化科学専攻開設科目：地球史予測学特別講義Ⅱ，惑星資源科学特論，同演習，同野外実験

6. 提出書類 以下の書類をA4版にて作成すること

1) 履歴書（市販の用紙使用，学位明記，署名捺印）

2) 研究業績目録（審査付き論文，著書，その他報告に区分して記載）

3) 主要業績10編の別刷（原則として最近5ヵ年の業績を含む代表的なもの10編：コピー可）

4) 教育・研究活動の概要（2,000字程度の自由形式）

5) 教育・研究に対する抱負（2,000字程度の自由形式）

7. 応募締切 平成16年1月7日(木) 必着

8. 提出先

〒305-8571 つくば市天王台1-1-1

筑波大学地球科学系地球科学系長 木股三善宛*

（*封書に「応募書類在中」と朱書きし，簡易書留で郵送の事）

9. 照会先

筑波大学地球科学系

木股三善

Tel：029-853-4209

E-mail : kimata@arsia.geo.tsukuba.ac.jp

北海道大学低温科学研究所
(低温基礎科学部門) 教授公募

北海道大学低温科学研究所(低温基礎科学部門)では教授1名を公募しています。

研究内容は、生態系における物質循環に関わる「土壌微生物による分解系の研究」もしくは「水域微生物における一次生産・分解系の研究」です。研究手法については、特に問いませんが地球化学的方法も含まれます。教育は北海道大学大学院地球環境科学研究科を担当して頂く予定です。着任時期は平成16年4月1日以降なるべく早い時期です。

提出書類は、

- 履歴書(連絡先、大学入学以降の学歴、研究・教育歴、学位、受賞歴など)、
- 研究業績目録(査読制度のある学術誌に発表した原著論文、総説、著書、その他などに分ける)、
- 主要論文別刷りあるいはコピー10編以内(研究業績目録に印を付ける)、
- 科学研究費などの採択状況、
- 国内外の学会などでの活動状況(役職や編集委員などの担当歴、会議やシンポジウムの企画など参考になる事項)、
- これまでの研究概要と成果(2,000字程度)、
- 着任後の研究計画、研究展望、抱負など(2,000字程度)です。

応募締切は平成16年1月30日(金)(必着)です。封筒の表に「低温基礎科学部門教授応募書類」と朱書き、書留でお送り願います。

[書類提出先]

〒060-0819 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所長
本堂武夫

[問い合わせ先]

〒060-0819 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
田中 歩
Tel : 011-706-5493

E-mail : ayumi@lowtem.hokudai.ac.jp

ホームページ <http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/>

「地球環境研究総合推進費」
16年度新規研究課題の公募について

地球環境研究総合推進費は、地球環境政策を科学的に支えることを目的とした環境省の競争的研究資金です。研究機関に所属する研究者であれば、産学官等を問わず研究に参画できます。

11月11日(火)から12月22日(月)午前中まで、平成16年度新規研究課題を公募します。

公募の対象研究や募集方針、応募方法などの詳細を記した公募要項、並びに現在進行中の研究課題などについては、推進費ホームページをご覧ください。

※推進費ホームページ (<http://www.env.go.jp/earth/suishinhi/index.htm>)

〈問合せ先〉

環境省地球環境局研究調査室

E-mail : suishinhi@env.go.jp

平成16年度研究奨励金
対象研究計画の募集について

研究課題：

- (1) 低環境負荷型化学プロセス実現のための触媒作用に関する研究
- (2) 電子移動に関する理論およびシミュレーションに関する研究
- (3) エネルギー関連分野における新素材創製と新機能創出に関する研究
- (4) 電子情報分野において、自己組織化や特殊な場を利用して構造を構築し、新たなデバイス機能発現を目指した研究
- (5) 未利用生体物質機能の探索に関わる新しい手法の研究
- (6) 蛋白質工学等の手法を用いた、化石資源代替やバイオマス利用を可能にする反応あるいはプロセスの開発に関する研究
- (7) 生命分子を精密重合高分子とみなして新規な機能性材料の開発に活用する研究

応募締め切り：平成16年1月31日(土) 協会必着
件数および金額：上記の各課題につき1件とし、1件あたり100万円を贈呈し、用途は限定しない。

応募あて先(問い合わせ先)：

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町1-12

(山菱ビル4階)

社団法人 新化学発展協会研究奨励金係
Tel : 03-5297-8820, Fax : 03-5297-8821
E-mail : aspronc@aspronc.org
URL : <http://www.aspronc.org>

*応募要項および提出書類の作成様式は、上記ホームページにて入手可能です。

第40回霞が関環境講座および 三宅賞受賞者記念講演

地球化学研究協会は、第40回霞が関環境講座および三宅賞受賞者記念講演などを下記の日程で行ないます。師走のお忙しい時期ですが、ご興味のある方は是非ご参集下さい。

時間：2003年12月6日(土) 午後2:00～5:30
場所：霞が関ビル33階 東海大学校友会館
Tel : 03-3581-0121～9 千代田区霞が関3-2-5
地下鉄銀座線虎ノ門下車

講師：金龍之緒

(同和鉱業株式会社ジオテック事業部部長)

演題：「土壌・地下水汚染対策の推移と事例」

(今回の講座は、廃鉱から出る水、汚染された土を無公害化する仕事のノウハウを解説して頂けることが期待されます。同和鉱業株式会社は秋田県でいわゆる黒鉱と言われる銅・鉛・亜鉛・金の鉱山を数多く開発していた鑛床開発のベテラン会社ですが、近年は閉山し、環境保全の仕事を幅広くやっています)

講座終了後、ひきつづき三宅賞受賞記念講演および懇親会が開かれます。これらの行事へもご参加下さい。

三宅賞は、中村昇博士(神戸大学理学部教授)に授賞が決定し、「希土類元素の精密分析法開発による隕石の宇宙化学的研究」の記念講演を予定しています。

参加費：1,000円 但し賛助会員は無料
申込先：東京都杉並区高円寺北4-29-2-217
地球化学研究協会

Fax : 03-3330-2455 (Tel. 兼用)

申込方法：講座開講の5日前までに、ハガキまたは

Fax で、氏名・連絡先をお知らせ下さい。

E-mail : t-sagi@ka5.koalanet.ne.jp でもお取次ぎします。

プレベンチャー事業 平成12年度採択課題研究開発成果報告会

大学・公的研究機関発ベンチャー創出事業として平成11年度より科学技術振興機構が実施している、研究成果最適移転事業成果育成プログラムC(プレベンチャー事業)の平成12年度採択10課題が本年7月末に終了し、その研究成果を報告する。

主催：独立行政法人 科学技術振興機構(技術展開部
新規事業創出室)

http://www.jst.go.jp/giten/saiteki/pro_c/index.html

開催日時：平成15年12月15日(月) 10:30～17:30

(開始時間は予定)

参加対象：大学、TLO、公的研究機関、ベンチャー
関係者、一般希望者等

参加定員：200名

会場：日本科学未来館・みらいCANホール

(東京都江東区青海2-41)

参加費：無料(レセプションは有料)

申し込み問合せ先：「プレベンチャー事業報告会事務局」

日本科学技術振興財団 振興部内

Tel : 03-3212-8487, Fax : 03-3212-0014

E-mail : preven@jsf.or.jp

<<mailto:preven@jsf.or.jp>>

報告会ホームページ：

<http://ppd.jsf.or.jp/shinko/preven/>

※オンラインで申し込み出来ます。

発表課題：

カオス符号分割多元接続通信用チップ

梅野健(通信総合研究所)、高明慧

鉄シリサイド光センサ

牧田雄之助(産業技術総合研究所)、中山靖彦
立体内部カラーマーキング技術

中山信一(山梨県工業技術センター)、磯野光将
高性能ポリシリコン薄膜

三宅正司(大阪大学接合科学研究所)、江部明憲
放電式金属噴射プリンター

山口勝美(元名古屋大学)、洪秀明

低侵襲心臓手術用カテーテル

糸野孝志, 四津良平 (慶應義塾大学)

フォトリソグラフィによる偏光子

川上彰二郎, 佐藤尚 (東北大学電気通信研究所)

幹細胞操作技術

帯刀益夫 (東北大学加齢医学研究所), 鈴木義久
骨・軟骨組織の再生療法

加藤幸夫 (広島大学大学院), 辻紘一郎

腎疾患モデル動物

宮田敏男 (東海大学), 上田裕彦

第52回質量分析総合討論会 (2004, 名古屋)のご案内

主催: 日本質量分析学会

共催: 日本地球化学会, (社)日本化学会, (社)日本薬学
会, (社)日本生化学会, (社)日本農芸化学会, (社)日
本分析化学会, (社)日本食品衛生学会, 日本薬物
動態学会

協賛: 日本医用マススペクトル学会, (社)高分子学会,
(社)日本金属学会, (社)クロマトグラフィー科学
会, プラズマ・核融合学会, 日本表面科学会,
原子衝突研究協会, 日本熱測定学会, (社)本セラ
ミックス協会, (社)日本分光学会, (社)日本環境測
定分析協会

会期: 2004年6月2日(水)~6月4日(金)

会場: 名古屋市工業研究所
(名古屋市熱田区六番町3-4-41)

討論主題: 最先端科学と質量分析

概要: 例年通り, 一般講演(口頭発表およびポスター
発表)に加えて, 各部会を主体としたシンポジ
ウム, ワークショップや企業によるランチョン
セミナーを予定しています。

特別講演者(依頼中):

飯島澄男(名城大学理工学部), 赤崎勇(名城大学
理工学部), 神原秀記(日立製作所中央研究所),
Richard D. Smith (Pacific Northwest National
Laboratory), Fred W. McLafferty (Cornell Univer-
sity), Newman S. -K. Sze (Genomic Institute of
Singapore)

懇親会: 2004年6月3日(木)

名古屋ガーデンパレス(名古屋市中区錦3丁目11-13)

一般講演発表募集内容: 質量分析およびその周辺分野

に関する研究

発表申込締切: 2004年2月13日(金) 必着

要旨原稿締切: 2004年3月15日(月) 郵送分必着
2004年3月22日(月) Web分

事前参加登録締切: 2004年5月14日(金)

実行委員長: 小西英之(愛知教育大学)

連絡先: 〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

名城大学薬学部環境科学研究室内

質量分析総合討論会事務局

原田健一

Tel: 052-832-1781(333), Fax: 052-834-8780

E-mail: kiharada@ccmfs.meijo-u.ac.jp

本討論会の詳細と最新情報はこちらのホームページ
をご覧ください:

<http://www.mssj.jp/Japanese/Conference/2004/>

[追記]

日本地球化学会元会長の高岡宣雄会員の日本質量分
析学会学会賞受賞が決定しました。受賞研究題目は,
「極微量希ガス同位体比測定法の確立と地球科学的方法
によるテルルの二重ベータ崩壊の研究」です。

質量分析総合討論会で受賞講演が予定されておしま
す。

Rare Earths '04 in Nara, JAPAN

主催: 日本希土類学会

協賛: 日本地球化学会ほか

日時: 平成16年11月7~12日

場所: 奈良県新公会堂

〒630-8212 奈良市春日野町101番地

Tel: 0742-27-2630

内容: 希土類元素およびアクチノイドのf元素群に焦
点を当て, 基礎学問と応用研究の両面から, 幅広いト
ピックスについて討論が行われる。化学, 物理学はも
ちろん, 材料科学, 地球科学, 環境科学, および生物
学における様々なトピックスについて, 最新の研究成
果が発表される。

締切: 2004年3月15日 アブストラクト締切

2004年7月31日 論文原稿締切

2004年7月31日 事前登録締切

参加費: 2004年7月31日まで一般50,000円, 学生

20,000円, それ以降一般60,000円, 学生25,000円

申込先: 〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学大学院工学研究科物質化学専攻内

日本希土類学会事務局

Tel: 06-6879-7352, Fax: 06-6879-7354

E-mail: kidorui@chem.eng.osaka-u.ac.jp

http://kidorui.chem.eng.osaka-u.ac.jp/RE 2004.html

第3回地球システム・地球進化ニューイヤー スクール (NYS III) のお知らせ

第3回地球システム・地球進化ニューイヤースクール (NYS III) の参加登録は, 11月21日に締め切りしました。2003 11 25現在の登録数は, 以下の通りです。

【NYS III 参加登録速報】2003 11 25現在

総数 180

職員 PD D M B (D+M+B)

80 17 36 32 15 (83)

44% 9% 20% 18% 8% (46)%

なお, 正規の参加申し込みは, 締め切りしましたが, 以下の条件での「条件付き参加登録」を12/17(水)まで受け付けます。

「条件付き参加登録」: 締め切り=2003年12月17日(水)

- 1) 宿泊の必要のない方は, 期日まで受け付けます。
宿泊の必要な方は, 事務局が確保した宿泊分に若干の余裕がありますので。これが埋まるまでは申し込み順で受け付けます。これを超えた場合はキャンセル待ちとなります。従って, 宿泊が必要な場合は, 基本的にはご自身の責任で確保していただきます。詳細は申し込み時の返信メールを参考にしてください。
- 2) 食事 (6日夕食, 7日朝食のみ事務局で対応) は期日まで受け付けます。
- 3) レクチャーノートの前送発送はできません。
- 4) 参加費は一律3,000円 (一部参加も同じ) です。

企画詳細は, 以下の HP をご覧ください。

http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/earth/

第10回国際サンゴ礁シンポジウム 参加登録・講演申込みのお知らせ

10th International Coral Reef Symposium

日本サンゴ礁学会は, 下記の通り2004年に沖縄において第10回国際サンゴ礁シンポジウムを開催いたします。

現在, セカンドサーキュラーを配布・ウェブ上で公開して, 登録と講演申込を受け付けています。

講演要旨〆切は2003年12月25日, 講演者の登録〆切・登録料早期割引は2004年1月31日までです。

ご関心のある方は, 是非大会ホームページ

http://www.plando.co.jp/icrs 2004/

をご覧ください。登録・要旨受付もホームページからできます。

記

第10回国際サンゴ礁シンポジウム

日時: 2004年6月28日~7月2日

場所: 沖縄コンベンションセンター

主催: 日本サンゴ礁学会, 国際サンゴ礁学会

後援: 環境省, 外務省, 国土交通省, 沖縄総合事務局, 水産庁, 沖縄県

問い合わせ先: ブランドゥ・ジャパン

E-mail: icrs@plando.co.jp

Fax: 03-5470-4410

国際サンゴ礁シンポジウムは4年に1度開催され, サンゴ礁に関わる様々な分野の研究者・管理担当者が, 多数のミニシンポジウムにおいてサンゴ礁の諸科学, 管理, 環境などについて講演・議論を行います。日本での開催は始めてです。参加者は80~90ヶ国から1,200名以上と予想しています (前回バリで開催されたシンポジウムには, 90ヶ国から1,700名が参加しました)。

今回は, 全体テーマを「サンゴ礁生態系の恒常性と崩壊」と定め, 4つのサブテーマ「サンゴ礁生態系の進化」「サンゴ礁生態系が成立するための条件」「物質循環からみたサンゴ礁生態系の恒常性」「人間-サンゴ礁共存系の過去・現在, そして未来に向けての提言」に, 56のミニシンポジウム, 4つの特別セッション

ンと基調セッション「人々とサンゴ礁」が設定されて、現在講演を募集しています。また、シンポジウム期間中とその前後には、琉球列島を中心に17の巡検が企画され、こちらも参加者を募集しています。

静岡大学理学部 鈴木 敦
科学プログラム委員会委員長

第45回科学技術映像祭参加作品募集

科学技術に関するすぐれた映像作品を募集。基礎研究部門では学術的価値のある作品を特に募集しており、個人制作作品の応募も受け付けている。3月中旬に最優秀作品賞（内閣総理大臣賞申請中）1作品、文部科学大臣賞14作品を発表、応募締切は2004年1月31日まで。

●問合せ先：日本科学技術振興財団内
科学技術映像祭事務局
Tel：03-3212-2454 FAX：03-3212-0014
URL：<http://ppd.jsf.or.jp/shinko/pro/s-m/index.htm>

書評

「深海のパイロット 六五〇〇mの海底に何を見たか」

藤崎慎吾、田代省三、藤岡換太郎著
光文社新書 2003年7月20日初版

「深海のパイロット」と題する本書は、「深海へ人が行くことのわくわくするような面白さや素晴らしさを改めて多くの人に伝えたい」（はじめに、下線評者）という目的で三人の著者によって書かれた本である。編著者である藤崎慎吾氏は、第一部で（元、現）パイロット、司令（有人潜水艇の最高責任者）、支援母船船長ら関係者からの聞き書きの形で、深海に人が潜ることの大変さとしんどさ、潜航した人が目の当たりにする深海底の不思議さ、美しさ、そして、汚染の実態などを興味深く紹介している。そして、それを「しんかい2000」と「しんかい6500」の元パイロットである田代省三氏（経験豊富で沈着冷静・勇敢なパイロット）と藤岡換太郎氏（「しんかい6500」での最高潜航回数を持つ地球科学者）が、第二部と第三部で、それぞれの立場からフォローアップしている。副題からは

「しんかい6500」だけの話と考えられるかもしれない。しかし、本書は、「しんかい6500」の前に建造され、運用された「しんかい2000」から始まる日本における本格的な深度数千メートル級の科学目的の有人潜水艇の運用開始から現在までの運用の経験、深海での体験、その成果を歴史とともに語っている。

評者はこれまで「しんかい2000」と「しんかい6500」でそれぞれ複数回の潜航調査を行った経験がある。そんな評者のよく知らなかった海底に存在する人工物の潜水艇への危険性やゴミの問題などを含めて深海へまで人類活動の影響が目に見える形で及んでいること、地球科学者や生物学者でないパイロット達をも感動させる海底熱水系とその周辺の美しさ、生物の営みの不思議さ等が語られている。人類のまき散らした汚染が目に見える形で深海底まで及んでいること、人が深海底に行くことのわくわくするような面白さ、厳しさ、大変さを十分に伝えてくれる。また、科学的な説明のための写真や図の他に、潜水艇や母船の船内・船外の写真も数多く掲載されており、深海潜水艇そのものとその潜航を支援する母船で支援する人々の姿が詳細に描かれている。これは、これまでに出版された深海底の科学についての本にはほとんど書かれていないことであり、深海潜水艇そのものやその運航について興味ある人にも楽しめるものと思う。以上の理由から、本書を深海底に行ったことのない地球科学者や、さらに、一般の読者へ大いに薦めることができる。

本書の中では、有人潜水艇が将来的に必要なかどうかという点にそれぞれの著者がかなりのスペースを割いて議論している。現実には、運用にコストのかかる有人潜水艇が変わって、運用コストが安く、海底の様子を多くの人が同時に母船上で観察できる無人探査機（ROV）へと移行しようというのが日本に限らず世界の趨勢であるようだ。しかし、この本の著者達は、皆、将来的にも有人潜水艇が必要であると訴えている。その理由は、人の目の良さ、第六感、臨場感、深海底を感じる（イメージを持つ）こと、など様々な言葉で語られている。その中でも、経験豊富なパイロットである田代氏は両者を比較した後、「今後は無人探査機と有人潜水調査船の利用は、TPOできちんと区別する必要があります。しかし、無人探査機を利用する研究者やパイロットも、一度は自分の目で深海底を見て、何かを感じることは絶対に必要です。なぜなら、ハイビジョンの素晴らしい映像だけでは、我々は決して深海底を感じることはできないからで

す」と結論している（下線評者）。有人潜水艇が必要かどうかという議論は、極論すれば、地球科学者が現場を自分の目で見る必要があるか、それとも、その必要はないかという議論にもつながる重要なことであろう。地球科学者が、どのような場に於いても現場を自分の目で見て何かを感じることは、研究の方向と発展性を決める重要な要素であると評者は考えている。この本を読んで会員の皆さんにも、その点まで含めて考えていただければと思う。

最後に、この本の筆者達と同様、評者も、2002年度をもって運用停止となっている「しんかい2000」（現在でも潜航可能なのに、潜水船整備場の片隅で一般の見学コースの一部に飾られている）の一日も早い運用再開を切に願っている。

（岡山大学固体地球研究センター 千葉 仁）

「地下環境機能 廃棄物処分の最前線に学ぶ」

吉田英一著

近未来社 2003年6月刊 174ページ

著者は、日本地球化学会ではあまり知られていないかもしれない。しかし2003年9月の Goldschmidt 国際会議では、広島大学の日高氏とともに、S 34 (Geochemical Immobilization and Long-term Isolation of Waste) の chairman の一人として32件のセッションを取り仕切った。著者のバックグラウンドは、構造地質学（断層や褶曲から地質を研究する分野）であるが、これまで地下環境中での割れ目や断層の形状解析とそこでの岩石-地下水反応や、ウラン鉱床における放射性元素の移動など、いわゆる放射性廃棄物の地層処分に関するナチュラルアナログ研究を精力的に行ってきた。この廃棄物処分に関するナチュラルアナログという研究分野は、P. K. Kuroda 博士の「オクロ天然原子炉」に拠り所を得た研究の流れである、といえは納得される方々も多いに違いない。現在著者は、これらの経験をもとに名古屋大学博物館資料分析系および環境学研究科助教授として、環境地質学、応用地質学分野の研究を展開しつつある。

このような経験をもとに著された本書は、第1章「地下環境の研究」、第2章「地下環境機能の評価」、第3章「地下環境機能の室内実験」、第4章「長期的な地下環境機能」の4章から構成される。第1章では、著者の研究経歴からも想像されるように、諸外国の、おもに放射性廃棄物の地下隔離を目的とした研究

機関が、それぞれに進めている、工夫をこらした基礎研究のアウトラインが紹介されている。第2章では、それぞれの研究所が立地する場の地質（堆積岩とか花崗岩とか）に対する透水性や元素の拡散など物質科学的な実験的研究とその成果が紹介されている。とくに様々な放射性元素を用いたトレーサーが地質環境ごとに異なる移動特性を持つこと、地下坑道などの「穴」をあけることによる地下環境の変化、などが計測上の工夫とともに語られている。第3章では、多くの地球化学の研究がそうであるように、第2章の事象を室内実験でより正確にシミュレートするために、どの課題をいかにして克服するかについて、境界条件の設定法や酸素分圧の制御等が例として紹介されている。第4章は、ナチュラルアナログの紹介とともに“長期的な地下環境機能の変化と恒常性”について、時間のスケールをいれた課題として解説がなされている。

これら4章を読み、地層処分に関する地球科学的課題（とくに地球化学に関する課題）に対する研究の実施状況や次世代教育、社会に対するアカウンタビリティ等等、このままでいいのだろうか？ という疑問が評者ならずともわき上がってくる。それは著者においても同様であるらしく、序章（1章の前にある）には、いかにこの研究が未知の領域に探りを入れているものであるか、どこに困難さがあるのか、が書かれている。弱みをさらけ出した上での解説である。

昨今“理科離れ”等の言葉が流行し、“問題解決能力”が計画書に踊っている。しかし、いちばん根本にあるのは、“問題発見能力”ではないだろうか？ この本は、地下環境が持つ機能の研究を通して筆者がどのように問題を見いだしてきたか？ その楽しさはどこにあるのか？ を解説した本であり、このような環境科学的な課題に対して興味を有する学生、大学院生には一読を勧めたい本である。

（名古屋大学環境学研究科 田中 剛）

「安山岩と大陸の起原 ローカルからグローバルへ」
巽好幸著

東京大学出版会、B 5 版 213ページ

2003年9月12日発行、3,800円+税

沈み込み帯火成活動の研究でリーダー的な役割を果たしてきた海洋科学技術センター固体地球統合フロンティア研究システム（IFREE）の巽氏が、安山岩成因論と大陸の進化、さらにはマントルの化学的な分化

について、自らのモデルを示した。著者は同じ出版社から「沈み込み帯のマグマ学—全マントルダイナミクスに向けて」という本を1995年に出版している。この本により沈み込み帯の火山活動について学んだ読者も多いだろう。前著も個性的な内容を持っていたが、本書はさらに著者の研究の進め方、思考スタイルを押し出している。本全体が一つの流れを持っている構成なので、固体地球科学を専門としない読者でも、著者の語り口につられて最後まで読み通してしまう一冊である。

本書は6章から構成されているが、安山岩の成因、大陸地殻の成因、マントルの進化についての問題を提起した第1章に続いて、瀬戸内火山帯とそこに特徴的に見られる火山岩、瀬戸内火山帯活動期のテクトニクスセッティングの特異性についての記載に第2章があげられている。固体地球科学を専門としない地球化学者にとってはややローカルな議論に感じるところもあるだろうが、著者は後の章で展開する議論の基本となる記載の事実をここで説明している。第3章では瀬戸内火山帯に見られるMgに富む安山岩の成因について考えられるモデルを個々に検討し、沈み込む海洋地殻と堆積物の部分融解、それに引き続くメルトとマントルの反応によりこの種の火山岩が生じたと論じている。「ローカルからグローバルへ」という副題にあるように、小豆島にみられる高Mg安山岩から研究生活を始めた著者が、大陸地殻の成因やマントルの進化といったグローバルな問題に考えを膨らませるようになった過程が、続く第4章から第6章に著されている。第4章では瀬戸内の高Mg安山岩の成因を発展させて通常の沈み込み帯に見られる「普通の安山岩」の成因に切り込み、第5章では大陸地殻の成因まで話を広げている。最後の章では、沈み込み帯で起こっている物質交換により発生した、海洋プレート融解の残存物と一次地殻融解の残存物がマントルの進化にどのような影響を与えているかを議論し、大陸地殻の成因論にも著者としての現段階での最終的な答えを与えている。

地球科学においては、個々の研究者が取り組んでいる問題にどのようなグローバルな意味があるかを考えることが重要であるが、初学者には研究を発展させてゆくプロセスの一つの例として参考になるのではないかな。

個々の議論は、地質学、岩石学、地球物理学、地球化学など広い分野の知識が必要であり、初学者は前著や他の教科書を参考に読み進める必要があろう。本の

性格上、他の研究者のモデルについての説明は網羅的ではないが、巻末の文献リストにより読者は各自調べることができる。

本文の端々や「独り言」の部分には著者の研究生活のエピソードが語られている。年代測定会社へ依頼した分析で得た年代値の誤りによりモデルを変更しなければならなかった事件についても触れられている。著者は現在、IFREEにおいて年代測定、化学分析の重要性を考えた組織作りを進めているが、このあたりの経験がもたになっているのだろうかと感じた。学生から専門の研究者まで、一読をお勧めしたい一冊である。

(東京大学地震研究所 中井俊一)

「Environmental Applications of Geochemical Modeling」

Zhu, C. and Anderson, G. Cambridge 2002

本書は、環境サイトの汚染を特徴付け、汚染の将来予測をする方法として、地球化学モデリング (geochemical modelling) の有効性を示す目的で書かれた。特に、多くの事例研究を紹介し、環境化学を学ぶ学生や研究者向けにわかりやすく書かれている。

本書の序論である第一章では、環境問題の具体例 (高レベル放射性廃棄物、鉱山に關係した環境問題、埋立処分場、有害廃棄物の深地下水への注入等)、アメリカにおける環境法、地球化学モデルの重要性等が書かれている。

第二章では、地球化学モデルの概念、分類、モデルの評価、限界等について述べられている。特に地球化学モデルをスペシエーション-溶解度モデル、反応経路モデル、逆マスバランスモデル、物質移動カップリングモデルに分け、それぞれのモデルについてわかりやすく述べられている。

第三章では、熱力学の基礎 (平衡、化学反応、ギブス自由エネルギー、活動度、フガシィティー、活動度係数、酸化-還元、アルカリ度、酸性度、局所平衡等) について要領よくまとめられている。

第四章、第六章では、地球化学モデリングのためのコンピュータープログラム (コード、データベース、モデル) をまとめている。特に、汎用的なコンピュータープログラム (PHREEQC, MTEQAZ, EQ 3/6, Geochemist's Workbench™ 等) の説明がなされ、これらを使って計算を始めようという人にとっては有用

である。また、これらを使用する際の注意点についてもふれている。

第六章～十一章では、それぞれの地球化学モデル（化学性—溶解度モデル、表面吸着モデル、反応経路モデル、逆質量バランスモデル、反応移動カップリングモデル、速度論モデル）についての説明がなされ、その環境サイトへの応用例も示されている。

近年、水と岩石、土壌の関与した環境問題への高まりが見られるが、多くの場合、フィールド調査や分析的研究の段階に止まっている。しかしながら、環境問題を科学的に明らかにしたり、環境問題の解決（処理、処分等）をするためには、分析データ（水質、土壌組成等）の定量的解析が不可欠である。多成分、多相からなる環境サイトにおける物質移動の解析は、地球化学モデリングに基づかない限り、一般的には不可能である。しかしながら、一般的に地球化学モデリングは複雑で、理解しにくい。そのために、地球化学モデリングに基づく研究例は（特にわが国においては）非常に少ない。

本書は、地球化学を専門とする研究者、学生、現場従事者のみならず、環境問題に携わる多くの人たちにとって、大変に有用な本である。

本書は基礎的事項についてまとめているので、さらに進んで勉強しようとする人には、巻末の多くの参考文献、地球化学モデリングの Web Site が役に立つであろう（www.pitt.edu/czhu/book.html）。

（慶應義塾大学理工学部 鹿園直建）

地球化学講座 3 「マントル・地殻の地球化学」

野津憲治・清水洋共編

培風館 2003, 308 p.

わが国における地球化学を発展させるためには体系だった地球化学に関する教科書が重要ということで、その発行を日本地球化学会が検討し始めたのが1994年。1998年9月には松久幸敬氏を委員長とする「地球化学講座」編集委員会が正式に発足し、それ以来全8巻の講座としての枠組み、内容などが検討され、各執筆担当者への執筆依頼を経て、今年7月に講座の最初としての本書が発行された。まさに10年がかりの企画の実現であり、先ずは関係諸氏の努力を讃えと共に、その発行に対して慶賀の意を表したい。

本書は、地球化学が扱う対象のうち、特にケイ酸塩を主体とする地球の地殻・マントルを主題として、9

章および付録で組み立てられている。各章は、それぞれのテーマに関して現在研究の中心となって活躍している中堅研究者が執筆を担当している。また固体地球に関する現象を理解するためには、地球物理学や岩石学的な観点からの情報を考慮することも重要である。そのため、地球化学との接点をもったそれぞれの分野の専門家にも執筆依頼をして、最新の情報を得られるような配慮がされている。

1章は、地球物理学的な観点から現在考えられている地球内部構造や構成物質について、また2章では、固体地球を扱うための化学的手法として、元素や同位体組成などに関する基礎的な概念が要点をおさえた説明がされている。3章では、これまでも地球化学の研究史の中では古くから論じられてきた元素の分配に関して、最新の研究に基づいての詳細な解説がなされている。ただその内容はやや高度であり、初学者にとっては取りつきにくい感があるかも知れない。4章から6章は、固体地球の形成・進化を取り扱っている。4章は、原始太陽系から惑星形成の中での地球形成を概観し、地球形成直後に生じたと考えられている核の形成についての最新の情報に基づく考え方を紹介する。5章では、マントル分化とその結果としての大陸地殻形成・成長などについて、実証的な立場から現在考えられている状況について概説している。6章では、特に大気・海洋の形成およびその進化について、モデルの紹介や自らの方法論なども含めた実際のデータなどからの検討を、要領よく紹介している。また生物進化と大気の化学進化などの紹介も行っている。7章では、マントル・地殻の物質循環を扱っている。その理解のために必要な基礎知識として、相平衡に関する熱力学、岩石学的な面に関しての丁寧な記載が含まれているため、内容的にかなり盛りだくさんの印象がある。同一著者によって執筆されているので一つの章にまとめられていると考えられるが、内容的には基礎的な前半部分と、応用的な後半のダイナミクスに関する部分を別の章にしてもよかったのではないかと感もある。8章は、堆積岩などを含めた堆積作用に関する諸過程の概説と、それを用いての地球の進化を反映した地球表層環境の変遷についての紹介であり、簡潔ではあるが扱っている対象は広い。9章では、地殻内流体に関する現象として、マグマにおける揮発性元素および熱水に伴う種々の化学的現象について説明しており、多くの対象について要点をおさえた紹介がされている。またわが国における固体地球化学研究のハイ

ライトと題して、1970年以前にわが国で行われた世界的な見地からも注目度の高かった研究のいくつかを、付録として紹介されている。

上述したように、本書は固体地球化学に関するテーマのほとんどの部分をカバーしながら、それらについての研究現場からの最新の情報を与えられているという新鮮さが、何にもまして貴重であろう。またそれぞれのテーマの中で、現在どのような点が問題となっているかということをきちんと記述する努力がされていることは、地球化学を新たに学ぼうとする若い人々だけでなく、やや異なった他の分野で既に研究を行っている人々にとっても大いに参考になる。また序文に書かれているとおり、各章はそれぞれが独立した総説のような形で構成されており、執筆者の物の見方を尊重する方向でまとめられているということなので、読者はそれぞれの興味にしたがって任意の章からひもといでも全くの違和感はない。

ただ序文でも断りがあるように用語の使い方が章によって異なる部分があり、全体としては必ずしも統一はされていない。しかしこの点に関しては、評者としてはもう少し考慮して欲しかったとの感がある。少な

くとも重要な言葉については、その用い方についての異同があることを、簡潔に説明される部分があつてしかるべきであろう。例えばマントルの区分けとしての「上部マントル」という用語は、地下660 km 以下の「下部マントル」に対して、研究者によってそれより上部のマントルをさす場合と、410 km から660 km の部分は「マントル遷移層」として、410 km より上部のマントルのみをさす場合があり、本書では章によってその用い方が異なっている。このような点は解説がないと、少なくとも初学者にとっては混乱の原因となりかねない。

上記の問題点はあるが、本書は全体として固体地球化学についての基本的な考え方と現況を知る上で非常に有意義であり、固体地球に関して関心をもつ学生や教師ばかりでなく、現在ほかの関連分野で研究を続けている人たちにとっても大いに参考となると考えられる。そのため、是非一度本書を手にとってみることをお勧めしたい。また本講座として今後出版される他の本についても、その発刊が楽しみである。

(東京大学地震研究所 兼岡一郎)

2001年度日本地球化学会決算報告（2001年1月1日-12月31日）

収入の部

科目		収入額（円）		予算額（円）
1. 会費収入		9,429,250		9,572,000
	(内訳)			
	一般正会員		8,426,000	8,240,000
	学生正会員		344,750	584,000
	シニア正会員		40,000	35,000
	賛助会員		375,000	435,000
	海外会員		243,500	278,000
2. 刊行物売上		4,543,200		4,540,000
3. 広告料		1,335,000		1,250,000
	(内訳)			
	地球化学		1,020,000	970,000
	会員名簿		315,000	280,000
4. 出版助成		4,600,000		3,300,000
5. 雑収入*		685,604		50,000
6. 前年度名簿積立金		400,000		400,000
7. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
8. 前年度繰越金		11,666,140		9,900,000
収入計		36,059,194		32,412,000

*故立本博士ご遺族からの寄付金577,150円、出版者著作権協会からの65,000円、印刷費自己負担分20,000円を含む。

貸借対照表 (2001年12月31日現在)

資産の部

現金	29,938
普通預金（会計）	9,939,469
定額貯金	7,600,000
送金小切手	3,009,000
学会事務センター	3,152,294
計	23,730,701

負債・正味財産の部

前受会費	3,410,000
名簿積立金	0
基本財産充当引当金	3,400,000
未払費用*	1,284,412
正味財産	15,636,289
計	23,730,701

*地球化学 Vol. 34 No. 3, 4 印刷費
(2002年3月に支払済み)

支出の部 (2001年1月1日-12月31日)

科目		支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費		14,471,685		15,930,000	
	1.1 出版費		11,308,961		12,220,000
	1.1.1 印刷費		8,564,637		9,450,000
	1.1.2 編集費		2,100,000		2,100,000
	1.1.3 発送費		644,324		670,000
	1.2 行事費		353,000		450,000
	1.3 学会賞経費		49,927		40,000
	1.4 委員会活動費		147,598		300,000
	1.5 名簿積立金		0		0
	1.6 名簿作成費		867,637		950,000
	1.7 会員業務委託費		1,640,102		1,850,000
	1.8 会員業務郵税		104,460		120,000
2. 管理費		1,348,570		1,790,000	
	2.1 庶務費		150,000		150,000
	2.2 会議費		109,535		100,000
	2.3 通信費		28,912		40,000
	2.4 旅費		608,935		1,000,000
	2.5 選挙費		218,948		250,000
	2.6 雑費		13,840		50,000
	2.7 雑誌保管費		218,400		200,000
3. 予備費		25,500		400,000	
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000	
5. GC準備基金*		1,177,150		300,000	
6. 次年度繰越金		15,636,289		10,592,000	
支出計		36,059,194		32,412,000	

*故立本博士ご遺族からの寄付金577,150円、2000年度及び2001年度の準備基金（各30万円）の合計額。

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	6,164,075	2,400,562	←	0	8,564,637
1.1.2 編集	1,700,000	350,000	50,000	0	2,100,000
1.1.3 発送	644,324	←	←	0	644,324
出版費計	8,508,399	2,750,562	50,000	0	11,308,961

英文誌：Geochemical Journal Vol. 35, No. 1-6。

和文誌：地球化学 Vol. 35, 1-4（ニュースNo. 164-167, 連絡会ニュースNo.22, 23を合本発行）。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2001年度鳥居基金決算報告 (2001年1月1日-12月31日)

収入の部

科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	2,722,502
2. 定額解約利子	53,714
3. 普通預金利子	235
4. 鳥居先生寄付	3,000,000
5. その他	0
収入計	5,776,451

支出の部

科目	金額 (円)
1. 助成	400,000
内訳 助成100,000円2件	
200,000円1件	
2. その他	0
3. 次年度繰越金	5,376,451
支出計	5,776,451

資産状況

科目	金額 (円)
普通貯金	3,376,451
定額貯金	2,000,000
資産計	5,376,451

2002年度日本地球化学会中間決算（2002年1月1日-8月31日）

収入の部

科目	収入額（円）	予算額（円）	
1. 会費収入	5,470,500	9,435,000	
(内訳) 一般正会員		4,730,000	8,110,000
学生正会員		240,000	540,000
シニア正会員		25,000	35,000
賛助会員		200,000	470,000
海外会員		275,500	280,000
2. 刊行物売上	0	4,360,000	
3. 広告料	45,000	940,000	
(内訳) 地球化学		45,000	940,000
4. 出版助成	5,200,000	4,600,000	
5. 雑収入*	517,787	50,000	
6. 前年度名簿積立金	0	0	
7. 前年度基本財産引当金	3,400,000	3,400,000	
8. 前年度繰越金	15,636,289	10,592,000	
収入 計	30,269,576		33,377,000

*2001年度年会事務局より50万を含む

支出の部

科目	支出額（円）	予算額（円）	
1. 事業費	4,178,745	15,450,000	
1.1 出版費		2,741,255	12,000,000
1.1.1 印刷費		535,500	9,450,000
1.1.2 編集費		1,900,000	1,900,000
1.1.3 発送費		305,755	650,000
1.2 行事費		330,000	650,000
1.3 学会賞経費		0	30,000
1.4 委員会活動費		252,370	300,000
1.5 名簿積立金		0	500,000
1.6 名簿作成費		0	0
1.7 会員業務委託費		819,000	1,850,000
1.8 会員業務郵税		36,120	120,000
2. 管理費	1,133,125	1,550,000	
2.1 庶務費		150,000	150,000
2.2 会議費		72,120	100,000
2.3 通信費**		105,295	50,000
2.4 旅費		805,710	1,000,000
2.5 選挙費		0	0
2.6 雑費		0	50,000
2.7 雑誌保管費		0	200,000
3. 予備費	0	1,000,000	
4. 基本財産引当金	0	3,400,000	
5. GC準備基金	0	300,000	
6. 次年度繰越金	0	11,677,000	
支出計	5,311,870		33,377,000

**学会レンタルサーバー代 88,200円を含む

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	535,500	←	0	535,500
1.1.2 編集	1,500,000	350,000	50,000	0	1,900,000
1.1.3 発送	305,755	←	←	0	305,755
出版費計	1,805,755	885,500	50,000	0	2,741,255

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2003年度日本地球化学会予算 (2003年1月1日-12月31日)

収入の部

科目	収入額 (円)	2002年予算額 (円)
1. 会費収入	9,191,000	9,435,000
1.1 一般正会員	8,075,000	8,110,000
1.2 学生正会員	451,000	540,000
1.3 シニア正会員	45,000	35,000
1.4 賛助会員	375,000	470,000
1.5 海外会員	245,000	280,000
2. 刊行物売上	4,480,000	4,360,000
3. 広告料	1,200,000	940,000
3.1 地球化学	900,000	940,000
3.2 会員名簿	300,000	0
4. 出版助成	5,200,000	4,600,000
5. 雑収入	50,000	50,000
6. 前年度名簿積立金	500,000	0
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000	3,400,000
8. 前年度繰越金	11,677,000	10,592,000
収入合計	35,698,000	33,377,000

支出の部

科目	支出額 (円)	2002年予算額 (円)
1. 事業費小計	16,260,000	15,450,000
1.1 出版費	12,400,000	12,000,000
1.1.1 印刷費	9,850,000	9,450,000
(GJ)	7,000,000	6,600,000
(地化)	2,850,000	2,850,000
1.1.2 編集費	1,900,000	1,900,000
(GJ)	1,500,000	1,500,000
(地化)	350,000	350,000
(ニュース/HP)	150,000	50,000
1.1.3 発送費	650,000	650,000
1.2 行事費	650,000	650,000
1.3 学会賞経費	40,000	30,000
1.4 委員会活動費	300,000	300,000
1.5 名簿積立金	0	500,000
1.6 名簿作成費	900,000	0
1.7 会員業務委託費	1,850,000	1,850,000
1.8 会員業務郵税	120,000	120,000
2. 管理費小計	1,820,000	1,550,000
2.1 庶務費	150,000	150,000
2.2 会議費	100,000	100,000
2.3 通信費	150,000	50,000
2.4 旅費	1,000,000	1,000,000
2.5 選挙費	250,000	0
2.6 雑費	50,000	50,000
2.7 雑誌保管費	120,000	200,000
3. 予備費	1,000,000	1,000,000
4. 基本財産引当金	3,400,000	3,400,000
5. GC準備・開催基金	300,000	300,000
6. 次年度繰越	12,918,000	11,677,000
支出計	35,698,000	33,377,000
実収入*	20,121,000	19,385,000
実支出**	19,380,000	18,300,000
差引	741,000	1,085,000

*実収入：収入計から繰越金、基本財産引当金、名簿積立金を除いたもの。

**実支出：支出計から繰越金、基本財産引当金、名簿積立金を除いたもの。

2002年度日本地球化学会決算報告（2002年1月1日-12月31日）

収入の部

科目		収入額（円）		予算額（円）
1. 会費収入		9,329,500		9,435,000
	(内訳)			
	一般正会員		8,230,000	8,110,000
	学生正会員		370,000	540,000
	シニア正会員		50,000	35,000
	賛助会員		375,000	470,000
	海外会員		304,500	280,000
2. 刊行物売上		4,363,800		4,360,000
3. 広告料		940,000		940,000
	(内訳)			
	地球化学		940,000	940,000
	会員名簿		0	0
4. 出版助成		5,200,000		4,600,000
5. 雑収入*		669,204		50,000
6. 前年度名簿積立金		0		0
7. 前年度基本財産引当金		3,400,000		3,400,000
8. 前年度繰越金		15,636,289		10,592,000
収入計		39,538,793		33,377,000

*匿名寄付金94,188円、出版者著作権協会45,000円、2001年度年会事務局500,000円を含む。

貸借対照表 (2002年12月31日現在)

資産の部

現金	63,341
普通預金（会計）	12,823,222
定額貯金	7,600,000
普通貯金	3,009,000
学会事務センター	2,777,958
未収金*	120,000
計	26,393,521

*広告費1件

負債・正味財産の部

前受会費	3,100,000
名簿積立金	500,000
Goldschmidt積立金	300,000
基本財産充当引当金	3,400,000
未払費用*	554,400
正味財産（繰越金）	18,539,121
計	26,393,521

*地球化学 Vol. 36 No. 4 印刷費
（2003年3月に支払済み）

支出の部

科目		支出額（円）		予算額（円）	
1. 事業費		15,576,387		15,450,000	
	1.1 出版費		12,302,370		12,000,000
	1.1.1 印刷費		9,750,756		9,450,000
	1.1.2 編集費		1,900,000		1,900,000
	1.1.3 発送費		651,614		650,000
	1.2 行事費		543,900		650,000
	1.3 学会賞経費		29,022		30,000
	1.4 委員会活動費		501,495		300,000
	1.5 名簿積立金		500,000		500,000
	1.6 名簿作成費		0		0
	1.7 会員業務委託費		1,595,400		1,850,000
	1.8 会員業務郵税		104,200		120,000
2. 管理費		1,424,035		1,550,000	
	2.1 庶務費		150,000		150,000
	2.2 会議費		81,970		100,000
	2.3 通信費		115,170		50,000
	2.4 旅費		857,640		1,000,000
	2.5 選挙費		0		0
	2.6 雑費		44,955		50,000
	2.7 雑誌保管費		174,300		200,000
3. 予備費		299,250		400,000	
4. 基本財産引当金		3,400,000		3,400,000	
5. GC準備基金		300,000		300,000	
6. 次年度繰越金		18,539,121		10,592,000	
支出計		39,538,793		31,692,000	

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	7,568,856	2,181,900	←	0	9,750,756
1.1.2 編集	1,500,000	350,000	50,000	0	1,900,000
1.1.3 発送	651,614	←	←	0	651,614
出版費計	9,720,470	2,531,900	50,000	0	12,302,370

英文誌：Geochemical Journal Vol. 36, No. 1-6。

和文誌：地球化学 Vol. 36, 1-4（ニュースNo. 168-171, 連絡会ニュースNo.24, 25を合本発行）。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2002年度鳥居基金決算報告 (2002年1月1日-12月31日)

収入の部

科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	5,376,451
2. 普通貯金利子	220
3. その他	0
収入計	5,376,671

支出の部

科目	金額 (円)
1. 助成	400,000
内訳 助成100,000円 x 4件	
2. その他	0
3. 次年度繰越金	4,976,671
支出計	5,376,671

資産状況

科目	金額 (円)
普通貯金	2,976,671
定額貯金	2,000,000
資産計	4,976,671

2003年度日本地球化学会中間決算（2003年1月1日-8月31日）

収入の部

科目	収入額（円）	予算額（円）
1. 会費収入	8,427,750	9,191,000
(内訳) 一般正会員	7,570,000	8,075,000
学生正会員	350,000	451,000
シニア正会員	55,000	45,000
賛助会員	260,000	375,000
海外会員	192,750	245,000
2. 刊行物売上	0	4,480,000
3. 広告料	40,000	1,200,000
(内訳) 地球化学	40,000	900,000
会員名簿	0	300,000
4. 出版助成	4,900,000	5,200,000
5. 成果公開 (B)	1,230,000	
6. 成果公開 (C)	10,910,000	
7. 雑収入	10,920	50,000
8. 前年度名簿積立金	500,000	500,000
9. 前年度基本財産引当金	3,400,000	3,400,000
10. 前年度繰越金	18,539,121	11,677,000
収入計	47,957,791	35,698,000

支出の部

科目	支出額（円）	予算額（円）
1. 事業費	4,747,832	16,360,000
1.1 出版費	2,989,390	12,500,000
1.1.1 印刷費	595,350	9,850,000
1.1.2 編集費	2,000,000	2,000,000
1.1.3 発送費	394,040	650,000
1.2 行事費	303,000	650,000
1.2.1 年会など	303,000	
1.2.2 成果公開(B)	0	
1.2.3 成果公開(C)	0	
1.3 学会賞経費	0	40,000
1.4 委員会活動費	125,800	300,000
1.5 名簿積立金	0	0
1.6 名簿作成費	394,170	900,000
1.7 会員業務委託費	904,192	1,850,000
1.8 会員業務郵税	31,280	120,000
2. 管理費	1,239,305	1,820,000
2.1 庶務費	150,000	150,000
2.2 会議費	57,755	100,000
2.3 通信費	106,050	150,000
2.4 旅費	849,480	1,000,000
2.5 選挙費	72,345	250,000
2.6 雑費	3,675	50,000
2.7 雑誌保管費	0	120,000
3. 予備費	36,000	1,000,000
4. 基本財産引当金	3,400,000	3,400,000
5. GC準備基金	300,000	300,000
6. 次年度繰越金	0	12,818,000
支出計	9,723,137	35,698,000

11. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	0	595,350	←	0	595,350
1.1.2 編集	1,500,000	350,000	150,000	0	2,000,000
1.1.3 発送	394,040	←	←	0	394,040
出版費計	1,894,040	945,350	150,000	0	2,989,390

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

和文誌4号は、全て英文誌と同時に発送し、発送費は英文誌に含まれる。

2004年度日本地球化学会予算 (2004年1月1日-12月31日)

収入の部

科目	収入額 (円)	2003年予算額 (円)
1. 会費収入	9,255,000	9,191,000
1.1 一般正会員	7,952,000	8,075,000
1.2 学生正会員	579,000	451,000
1.3 シニア正会員	45,000	45,000
1.4 賛助会員	375,000	375,000
1.5 海外会員	304,000	245,000
2. 刊行物売上	4,480,000	4,480,000
3. 広告料	940,000	1,200,000
3.1 地球化学	940,000	900,000
3.2 会員名簿	0	300,000
4. 出版助成	4,900,000	5,200,000
5. 雑収入	50,000	50,000
6. 前年度名簿積立金	0	500,000
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000	3,400,000
8. 前年度繰越金	12,818,000	11,677,000
収入合計	35,843,000	35,698,000

支出の部

科目	支出額 (円)	2003年予算額 (円)
1. 事業費小計	16,010,000	16,360,000
1.1 出版費	12,750,000	12,500,000
1.1.1 印刷費	9,850,000	9,850,000
(GJ)	7,000,000	7,000,000
(地化)	2,850,000	2,850,000
1.1.2 編集費	2,250,000	2,000,000
(GJ)	1,750,000	1,500,000
(地化)	350,000	350,000
(ニュース/HP)	150,000	150,000
1.1.3 発送費	650,000	650,000
1.2 行事費	450,000	650,000
1.3 学会賞経費	40,000	40,000
1.4 委員会活動費	300,000	300,000
1.5 名簿積立金	500,000	0
1.6 名簿作成費	0	900,000
1.7 会員業務委託費	1,850,000	1,850,000
1.8 会員業務郵税	120,000	120,000
2. 管理費小計	1,750,000	1,820,000
2.1 庶務費	150,000	150,000
2.2 会議費	100,000	100,000
2.3 通信費	150,000	150,000
2.4 旅費	1,000,000	1,000,000
2.5 選挙費	0	250,000
2.6 会計費	100,000	
2.7 雑費	50,000	50,000
2.8 雑誌保管費	200,000	120,000
3. 予備費	400,000	1,000,000
4. 基本財産引当金	3,400,000	3,400,000
5. GC準備・開催基金	0	300,000
6. 次年度繰越	14,283,000	12,818,000
支出計	35,843,000	35,698,000
実収入*	19,625,000	20,121,000
実支出**	17,660,000	19,480,000
差引	1,869,000	641,000

*実収入：収入計から繰越金、基本財産引当金、名簿積立金を除いたもの。

**実支出：支出計から繰越金、基本財産引当金、名簿積立金を除いたもの。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2004年3月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は1月末までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

米田成一

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03-3364-7142, Fax : 03-3364-7104

E-mail : s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部